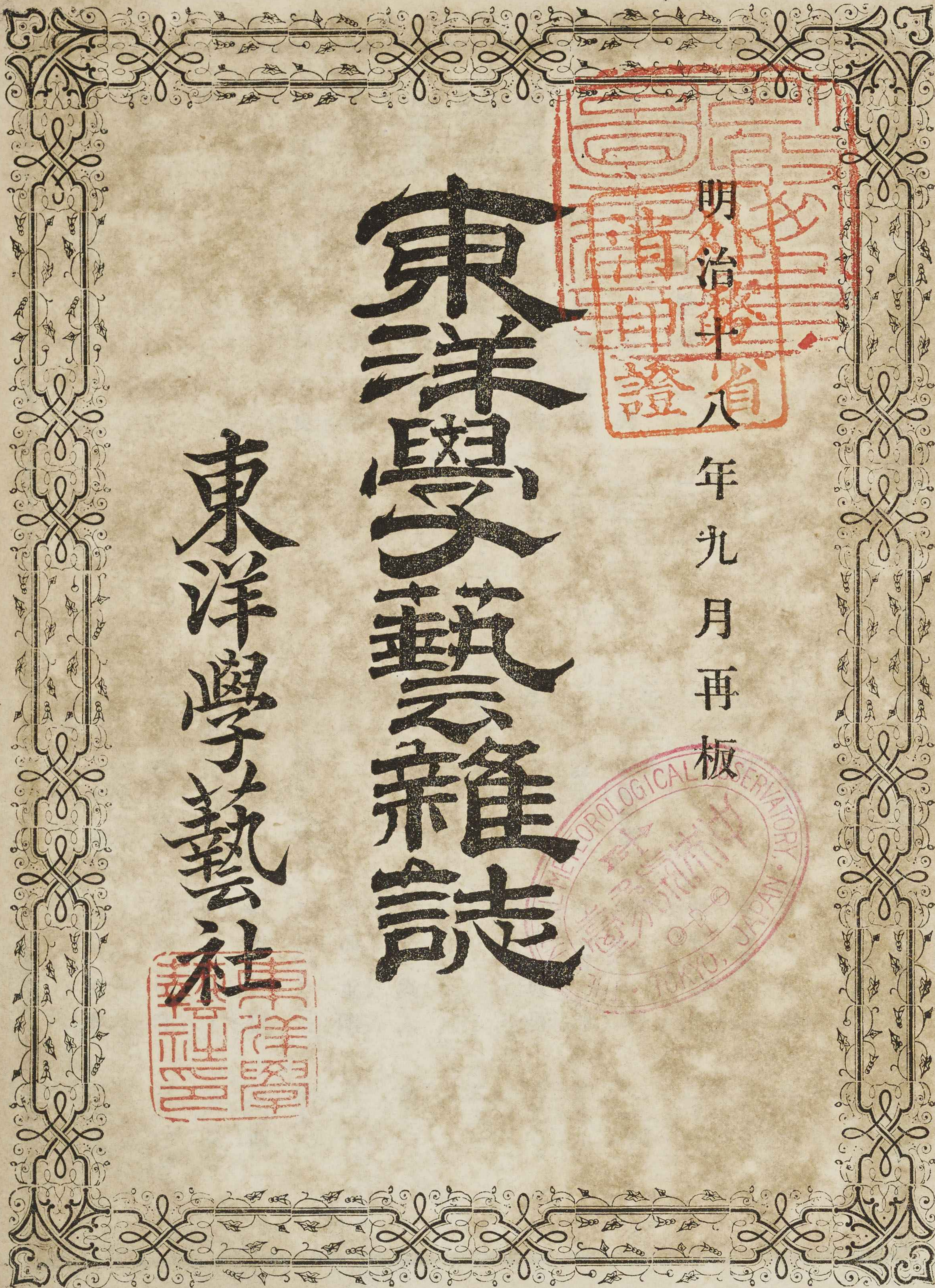


東洋學藝雜誌

東洋學藝社

明治十八

年九月再板



(15) 5-76-1 III

東新學堂

東新學堂

國前十八年正月再刻

○目錄

論說之部

論說 人名 丁數

○化學ト物理學トノ關係ヲ論ズ 櫻井 錠二 二三五、

○温泉之説 三宅 秀 二三七、二七二、三五五、三六九、

○有機物ノ合成 松井 直吉 二四一、二六八、

○虎列狼病談 谷田部 梅吉 二五四、

○肥前有田郷ノ起縁並陶器製法畧記 枕石 散人 二五六、二八六、

○月前子規 久米 幹文 二五九、

○木村重成ノ遺墨 磯野 竹翠 二六〇、

○月下聞杜鵑 竹翠 漁史 二六一、

○一雨俄涼 全上

○贈某 全上

○書ハ美術ナラスノ論ヲ讀ム 岡倉 覺三 二六一、二九六、三九七、

○普通教育上理學教授ノ切要 西邨 貞 二六七、

○人口ノ増殖ハ懼ルニ足ラス 井上 哲次郎 二七五、

○支那紙幣史略 平沼 淑郎 二七八、

○豆腐ノ説 渡邊 鏡次郎 二七九、

○名ノ辨 無腸 道人 二八一、

○近聞三件 (西字雜誌抜萃) 靜 眠子 二八四、

○心理新説序 井上 哲次郎 二八九、

○雜詩七首 吉本 眞男 二九〇、

○月洲先生詩鈔 二九一、

○世界ノ過去未來ヲ論ズ 太玄 眞人 全上

○神論 杉浦 重剛 三〇一、

○蟻ト植物トノ關係 全上

○微分ノ原理 菊地 大麓 三〇四、

○牧都宇氏ニ答フ 井上 圓了 三〇五、

○有機化學ノ講究 久原 躬弦 三一〇、三四六、

○古代ノ事物ノ容易ニ消滅セサル所以ヲ論ズ 松下 丈吉 三一三、

○未定觀察ノ虚謬	千頭清臣	三一五、
○硫酸鉛室内ノ化學變化ヲ論ス	渡邊鏡次郎	三一九、
○耶蘇辨惑序	外山正一	三二〇、
○山家秋來	久米幹文	三二四、
○刺客ト詠スル詩	八門奇者	三二五、
○觀櫻門蹠血圖引二百廿韻	内田周平	三二六、
○人口概論上篇	添田壽一	三二八、
○古典講習科開業演說案	小中村清矩	三三五、
○音色寫畫及ヒ音色塵畫	村岡範爲馳	三四一、
○蝦蟇ノ心臓	箕作佳吉	三五一、
○讀豆腐之說	無腸道人	三五八、
○市川盛三郎君略傳	杉浦重剛	三六二、
○夜座偶成	宮崎道三郎	三六三、
○宿山寺題畫壁	全	三六四、
○夏日風雨志喜	杉浦楠陰	全上
○海舟翁新体詩	外山正一	全上

○大學生ノ數	大竹碧	三六五、
○塚穴考	佐々木忠二郎	三七二、
○落体ノ速力ヲ論シ併セテ一原素說ニ及フ	渡邊鏡次郎	三七六、
○ホルツ氏發電器用法	村岡範爲馳	三七八、
○教育學講セサル可ラス	中川元	三七九、
○人工製藍之說	高松豐吉	三八二、
○東京經濟雜誌社長田口卯吉君ノ反譯サレタル大英商業史	太拙居士	三八七、
○廣瀨元龔傳	岡本監輔	三九三、
○林娜斯先生傳	松原新之助	三九五、
○朝顔の花ヲ寄せて學童を獎勵ス	小川鍵次郎	三九六、
○秋 (西詩譯)	望月秋太郎	全上
○論理學一斑	千頭清臣	四〇一、四六八、
○日本人民固有ノ性質	石浦居士	四〇三、四三五、
○衛生モ亦教育家ノ一責任乎	松山誠二	四一二、四四四、

○人權新説の著者よ 質し並せて新聞記 者の無學を賀と	外山正一	四一五、
○渡邊君ノ一原素説 ヲ讀ム	隈本有尙	四二一、
○拔刀隊歌 (譯外山氏作)	松井千行	四二三、
○雜詩(八)	吉本眞男	四二四、
○代悲白頭翁歌	大竹美鳥	四二五、
○歴史ノ編纂法ヲ論 ス	嵯峨根不二郎	四二六、
○音色寫畫ノ略解	村岡範爲馳	四三三、
○本邦新産鉄鑛畧記	岩佐巖	四四七、
○外山大先生ノ駁論 ヲ復駁ス	人權新説著者	四四八、
○田口卯吉君ノ譯サ レタル大英商業史	太拙居士	四五二、
○儒論	杉浦正臣	四五八、四八一、
○天地行	種梅鋤夫	四五九、
○錫磊雲雀詩	春泓小史	全上
○湘南秋信	鈴木券次郎	四六一、
○道德ノ大本ハ何ニ 因リテ定メノ乎	添田壽一	四六一、四九二、
○病院録事ノ互換ヲ 圖ル演文	三宅秀	四六五、

○山毛樺ノ説	松村任三	四七〇、
○負惜の強き人權新 説著者よ質し併せ てスペンセル氏の 爲に冤を解く	外山正一	四七二、
○耶蘇辨惑序	井上哲次郎	四八二、
○寄中村敬宇先生書	全上	四八四、
○以寒夜客來茶當酒 之字各爲韻得古体 七篇	竹翠漁父	四八六、
○守歲擬古詩行行重 行行	森槐南	全上
○運	大竹みどり	四八七、
○毒魚之説	松原新之助	全上
○越地瑣談	崇山居士	四八九、五二一、
○攝影術ノ沿革	磯野徳三郎	四九七、五三四、
○社會と一個人との 關係の進化	有賀長雄	五〇〇、
○六足蟲類獲集並ニ 貯藏法 <small>インセクタ、ヘキサポダ</small>	石川千代松	五一〇、五三一、
○復井上巽軒君書	中村正直	五一二、
○フリドリツヒ、シュエ ーレル氏一生ノ事 業	久原躬弦	五一五、
○答人辨經義書	杉浦正臣	五一九、

○龜井戸村觀臥龍梅賦拙詩四章以呈巽軒先生請賜尊和	白川 船山	五二〇、
○呈巽軒井上先覺	渡邊 寛	全上
○僚友宇川盛三郎君將之佛國聊賦七律三章以送其行	大江 敬香	全上
○土器塚考	福家梅太郎 坪井正五郎	五二六、
○野蠻人種ノ消滅	松下 丈吉	五三七、
○スミツス氏搖鐘實驗ノ景况	田中 正平	五四〇、
○かたばみろねのたね	ととねまきた	五四三、
○日々新聞ノ宗教論ヲ評シ併セテイビ	井上哲次郎	五四四、
○讀關原軍記	杉浦 正臣	五四七、
○北川岸次君傳	全上	五四八、
○ソル、ジョーン、ラボツク氏ノ畧傳	鬼窟 主人	全上
○後樂園雜詩	大江 敬香	五五二、
○呈井上巽軒大兄	全上	全上
○おいしらす(佐久間象山翁謫居の歌)	全上	全上
○寒邨夜歸といへる題よてよめる新体の歌	小川 鍵次郎	五五三、

雜報之部

○黃石公ハ鬼物ニアラス又隱君子ニアラサルヲ論ス	井上 圓了	五五三、
○虎列刺病新治療法	二六四、	二六五、
○岩石顯微鏡上の試験	全上	全上
○函館古石器發掘	全上	全上
○肥前高島炭坑防碍	全上	全上
○仙臺毒蝶	全上	全上
○新体詩抄發兌	全上	二六六、
○東京數學會社の事	二九八、	全上
○高松豐吉氏の事	全上	全上
○地圖測量圖一定の事	全上	全上
○重力率測定の事	全上	全上
○金石採集の事	全上	二九九、
○鯢魚の事	二九九、	全上
○統計年鑑	全上	全上
○毛布粗絹を最良鮮美の絹と一般の効能を有せしむる法	全上	全上

○物理學講習所	三〇〇、	○印刷板石	四六四、
○東京大學古器物貯藏の事	三三四、	○無名會	全上
○鷺津毅堂先生の事	全上	○歐洲地質圖	全上
○ドクトルナウマン氏白根山實驗の事	三三四、三九九、	○黑鉄發見 <small>ブラツクバン</small>	全上
○學位授與式の事	三六七、	○高島家譜	全上
○東京化學會記事の事	全上、五五八、	○蛇木よ化と	全上
○東京大學へ資金獻納	三六八、	○雪花石膏	全上
○植物學會の事	全上	○得業士	四九六、
○渡邊渡氏の記行抄録	三六八、	○海外留學	五二九、
○名家墳墓表	四〇〇、	○土地の卑窪	全上
○人權新說増補改正	四三二、	○砂金の粒	全上
○東京生物學會記事	四三二、四九五、 五五八、	○久能山第三期層	五三〇、
○大英商業史の校正	四三二、四三三、	○信濃の鹽泉	全上
○イェンソンの演説	全上	○工學協會紀事	五五七、
○煙水晶をして無色水晶たらしむる法	全上	○數學會	五五九、
○遠州石油産地方の景況	四三二、	○子午線一定よ付万国會議の事	全上
○工學用語の一定	四六三、	○獨乙國よりの通信	五六〇、
○肥料及昆布の分析	全上	○動物進化論の事	五六一、
		○十三年より十六年までの氣象	五五九、

東洋學藝雜誌第十一號

明治十五年八月廿五日發兌

化學ト物理學トノ關係ヲ論ス

東京大學理學部講師 櫻井錠二

理學ヲ講究スルハ教育上ヨリ論スルモ實益上ヨリ論スル
 モ共ニ切要ナルコトハ漸次輿論ノ認可スル所トナリ即チ當
 今我國大學中學師範學校ハ勿論小學ニ於テモ亦其初步ヲ
 教授スルニ至レリ然リ而シテ之ヲ教授スルニ當リ最要ナ
 ル一點アリ方法ノ善良ナル是レナリ
 善良ナル方法トハ適宜ニ順序ヲ追ヒ之ヲ教導スルノ意ナ
 リ譬ハ未タ加減乗除ノ理ヲ解セサル少年ニ高等數學ヲ教
 示セントスルモ畢竟無効ノ業タルベク又物理學ノ初步タ
 ニ理會シ得サル者ニ天文學ノ高尚ナル部分ヲ講述スルモ
 亦其功ヲ奏スルヲ得ス故ニ今教則ノ宜シキヲ得ント欲セ
 ハ先ツ諸學科ノ關係スル所ヲ明ニシ最初其最モ普通ナル
 モノヲ教授シ漸次專業ニ及ホスヨリ外アラサルヘシ
 諸學科ヲ分類シ相互ノ關係ヲ討究スルハ右ニ論スルカ如
 ク甚ダ切要ナルモノニシテスペンサル等ノ大家此業ニ從
 事スレバ其論中猶ホ少シク穩當ナラサルコトナキニ非ス然

レモ余ハ今此問題ニ就キ普ク論及スルヲ欲セス唯々化學
 ト物理學ノ關係ニ就キ少シク述ル所アラントス
 化學ヲ研究セント欲セハ先ツ數學及ヒ物理學ノ二科ヲ修
 メサルヘカラス抑モ物理學ト化學ノ關係ハ甚ダ密着ナル
 モノニシテ理學者ニ在テ其分界ヲ檢定スルモ猶ホ困難ヲ
 覺フ程ナレハ理學ニ從事セサル者ニ於テ其區別ノ如何ヲ
 曉知スルコト能ハサルハ固ヨリ驚クニ足ラス然レトモ物理
 學ヲ修メスシテ化學ヲ研究セント欲セハ決シテ其蘊奧ニ
 達スルヲ得ス而シテ物理學ヲ修メント欲セハ又數學ノ助
 ヲ要セサルヲ得サルナリ
 物理學ノ助ヲ要セスシテ化學分析術ニ熟達シ得ルモノハ
 之レアリ然レトモ唯其分析スルヲ以テ化學ノ趣意トナス
 ニ非ス化學ハ原子ノ震動ニ因テ生スル所ノ變化ヲ審究ス
 ルノ學ナリ原子トハ物質ヲ組成スル所ノ至微至細ナルモ
 ノニシテ假令器械力或ハ化學力ヲ以テスルモ分析スヘカ
 ラサルモノヲ云フ且ツ甲元素ノ原子ハ乙元素ノ原子ト其
 性質ヲ異ニシ就中其重量ニ至テハ六十有餘ノ元素各々固
 有一定ノ原子量ヲ備フルモノトス是レ現今ノ原子說ノ以

テ古昔グリーキ理學者ノ唱ヒシ原子説ト異ナル所ナリ
 二個以上ノ原子聚合シテ分子ヲ成ス物理學ハ其分子ノ震
 動ニ因テ生スル所ノ變化ヲ審究スルノ學ナリ故ニ眞理化
 學ハ物理ノ進歩スルニ隨ヒ益々蘊奧ニ入ルカ如シ何トナ
 レハ分子ノ性態未ダ明瞭ナラサレハ原子ノ性態ニツキ思
 想ヲ起スヲ難キカ故ナリ現今化學者ノ研究スル所多ク物
 理學ニ關係スル少ナキ部分ニ止マルモノハ是レ理ノ然ラ
 シムルモノト云フモ亦可ナランカ
 然リト雖モ化學者カ世上ニ於テ奏スル所ノ實功ハ已ニ大
 ナリ蓋シ他流ノ學者ニ先キタチ原子ノ性態ニ關セル思想
 上ニ就キ大沿革ヲ起シ理學ヲシテ今日ノ景況ニ運ハシム
 ルニ至レリ然リ而シテ後來尙ソノ高位ヲ保チ益々學術ノ
 進歩ヲ圖ラント欲セハ宜シク物理學上ヨリ化學ノ眞理ヲ
 講究シ得ヘシ
 今化學上已ニ認可サレタル結果ノ近年ニ至リテ物理學上
 ヨリ更ニ確定サレタルモノ、一例ヲ學ケ以テ兩學關係ノ
 密着ナルヲ證セントス
 凡ソ元素氣狀ナルトキハ其分子中少クモ必ス二個ノ原子

アリ是レ化學總論中至重至大ナル定律ニシテ所謂酸素ハ
 單々酸素ニ非スシテ酸化酸素ナリ又鹽素ハ單々鹽素ニ非
 スシテ鹽化鹽素ナリ然ルニ水銀其他一二ノ元素ハ右ノ律
 ニ抵觸シテ其氣狀分子中僅ニ一原子ヲ含有スルノミ更ニ
 之ヲ論スレハ其原子量ハ分子量ト同一ナリ是レ化學者ノ
 實驗上ヨリ認可スル所タリ
 今更ニ歩ヲ進メ物理學上ヨリ右同結果ヲ得タル理由ノ大
 畧ヲ陳述セン夫レ氣体ノ比熱ハ定壓上檢定スル(0)ト定
 容上檢定スル(0)ト差違ナカル可ラス而シテクラウシユ
 スハ熱動學上ヨリ論及シテ其比例(0-0)ノ一、六七ナルコ
 チ確言セリ然ルニ今酸素、水素、窒素、等ノ單氣ヲ以テ實驗
 上ニ就テ該比例ヲ測定スルニ其一、二、九五乃至一、四一三
 ナルヲ發見ス即チ右單氣一定容ノ溫度ヲ高進セントスレ
 ハ理論上算定スル所ヨリ餘計ニ熱ヲ要スルヲ知ル然ラハ
 則チクラウシユスノ推論ハ不可ナルカ曰ク否ナ是亦其説
 ナキニアラス蓋シ斯ク潛隱スルトコロノ熱ハ變シテ分子
 中一様ノ運動(即チ旋轉運動)ヲ生スルニ由ル而シテ其旋
 轉運動ノ由テ起ル所ハ必ラス分子中少クトモ二個ノ原子

ア、ハ、サ、ル、ヲ、得、サ、ル、ナ、リ、是、レ、專、ラ、ク、ラ、ウ、シ、ユ、ス、マ、ク、ス、ウ
ヘ、ル、ト、ム、ツ、ン、等、ノ、事、業、ニ、關、ス、ル、所、ニ、シ、テ、實、ニ、現、今、物、理
學、ノ、基、礎、ト、謂、ツ、ヘ、シ、是、亦、化、學、者、ノ、全、ク、化、學、上、ヨ、リ、論、及、シ
テ、得、タル、所、ノ、結、果、ト、同、一、ナル、ヲ、知、ル、ニ、足、レ、リ

氣、狀、分、子、ノ、運、動、ニ、二、ア、リ、即、チ、旋、轉、運、動、及、ヒ、橫、行、運、動、是、レ
ナ、リ、然、ル、ニ、右、論、ス、ル、カ、如、ク、旋、轉、運、動、ハ、分、子、中、ニ、起、ル、モ、
ニ、シ、テ、若、シ、其、分、子、單、々、一、原、子、ヲ、含、有、ス、ル、者、ト、セ、ハ、更、ニ、該
動、キ、コ、ト、必、セ、リ、果、シ、テ、然、ラ、ハ、ク、ラ、ウ、シ、コ、ス、ノ、理、論、上、ヨ、
リ、算、定、シ、タル、結、果、ト、實、驗、上、測、定、ス、ル、所、ト、同、一、ナ、ラ、サ、ル、ヲ
得、ス

方、今、ス、ト、ラ、ス、ブ、ル、グ、大、學、ニ、於、テ、物、理、學、ノ、教、授、タ、ル、ク、ン、ト
及、ヒ、同、學、ノ、ワ、ル、ブ、ル、グ、ハ、此、點、ノ、可、否、ヲ、決、定、セ、ン、タ、メ、一、ノ
試、驗、ヲ、施、行、セ、リ、乃、チ、水、銀、氣、中、ニ、於、テ、音、ノ、速、力、ヲ、檢、定、シ、以
テ、前、ニ、陳、述、セ、シ、所、ノ、 O_2 ノ、價、ヲ、算、計、ス、ル、ニ、果、シ、テ、一、六
七、ナ、ル、ヲ、發、見、シ、乃、チ、水、銀、氣、ノ、分、子、ハ、單、々、一、原、子、ヲ、含、有、ス
ル、ヲ、確、定、シ、タ、リ、此、結、果、タ、ル、ヤ、一、ハ、以、テ、化、學、者、カ、己、ニ、化、學
上、ヨ、リ、論、及、シ、得、タル、所、ト、同、一、ナル、ヲ、指、示、シ、一、ハ、以、テ、物、理
學、及、ヒ、數、學、上、ヨ、リ、推、論、シ、得、タル、結、果、ノ、確、實、ナル、ヲ、徵、ス、ル

ニ、足、レ、リ、（此、試、驗、ノ、細、密、ヲ、知、ン、ト、欲、セ、ハ、千、八、百、七、十、五、年
ペ、ル、リ、ン、化、學、會、々、誌、第、八、帙、九、百、四、十、五、葉、ニ、登、録、シ、タル、ク
ン、ト、及、ヒ、ワ、ル、ブ、ル、グ、二、氏、ノ、原、文、ニ、就、テ、觀、ル、ヘ、シ、）

夫、レ、物、理、化、二、學、ノ、關、係、此、ノ、如、ク、ニ、シ、テ、該、二、學、ハ、又、諸、學、科
中、最、モ、普、通、ナル、モ、ノ、ト、ス、何、ト、ナ、レ、ハ、其、究、ム、ル、所、萬、物、ノ、體
質、ニ、關、シ、テ、物、ノ、何、タル、ヲ、問、ハ、ス、現、象、ノ、何、所、ニ、發、出、ス、ル、ニ
係、ハ、ラ、ス、皆、ソ、ノ、總、括、ス、ル、ト、コ、ロ、ト、ナ、ル、ヲ、以、テ、ナ、リ、之、ヲ、再
言、ス、レ、ハ、該、二、學、上、決、定、セ、シ、所、ノ、規、律、ハ、一、般、ニ、之、ヲ、應、用、ス
ヘ、ク、シ、テ、動、植、二、物、有、機、無、機、兩、體、悉、ク、ソ、ノ、所、轄、タ、リ、且、ツ、生
物、學、ノ、如、キ、ハ、之、ヲ、生、物、ノ、化、學、及、ヒ、物、理、學、ト、云、フ、モ、亦、虛、言
ニ、非、サ、ル、ヲ、信、ス、ル、ナ、リ

○温泉之說

東京大學醫學部長

三宅 秀

本、邦、ノ、温、泉、ニ、富、メ、ル、亦、夫、ノ、歐、米、諸、州、ニ、讓、ラ、ス、就、中、其、名、ノ
最、モ、顯、ハ、ル、者、ハ、攝、州、有、馬、陸、前、鎌、崎、豆、州、熱、海、作、州、湯、江、豫
州、道、後、加、州、山、中、紀、州、湯、峰、龍、神、湯、崎、信、州、草、須、浦、野、淺、間、但、州
城、崎、越、中、大、牧、山、田、相、州、塔、澤、湯、本、氣、賀、宮、下、底、倉、堂、島、蘆、野、豆
州、伊、藤、修、禪、寺、上、州、伊、香、保、野、州、二、荒、峯、上、湯、越、後、關、山、肥、州、温
泉、山、等、其、他、枚、擧、ス、ル、ニ、遑、ア、ラ、ス、邦、俗、人、ノ、沈、痼、痼、疾、ヲ、抱、シ

者ハ皆其地ニ遊ンテ洗浴ス然レヒ其効用ヲ論スルニ至テ
ハ未ダ嘗テ瞻然トシ知ル者アラス顧フニ是他ナシ温泉ノ
地ハ概テ浮屠氏開基ノ境ニ係ルヲ以テ多クハ其効ヲ神傳
夢想等ノ虛喝ニ托シ古來其妄誕ノ說ヲ信シテ遂ニ其眞理
ヲ究ムル者ナキカ故ナリ或ハ偶々其理ニ近キコトアルモ必
竟偶中ト謂サルヲ得ス豈亦惜マサル可ンヤ今ヤ我輩幸ニ
ノ斯隆運開明ノ日ニ會シ苟モ此皇天無限ノ賜ヲシ其効驗
ヲ隱匿セシメ永世之ヲ不問ニ附スルニ忍ヒス因テ余今自
ラ揣ラス西洋書籍中ニ就テ其鑛泉ノ起原種別及ヒ効用ヲ
詳記シ側ヲ本邦有名ノ一二鑛泉ヲ舉テ比較演說シ其稿ヲ
收メテ學藝雜誌中ニ編ス庶クハ覽者之ニ由テ醫事ニ小補
アルヲ得ハ幸甚

温泉療法ノ來歴

舊史ヲ按スルニ本邦神代ノ昔シ大己貴少彥ノ二尊我豐葦
原ノ中津國ヲ經營シ給フ時百姓ノ疾病夭折ヲ憫ミ創メテ醫
藥禁厭及ヒ温泉ノ方ヲ定メ給ヒシニ百姓皆之ニ由テ聊賴
ス又大己貴尊躬親カラ病アリ少彥尊ニ謀リテ温泉ニ浴シ
給フニ即時靈驗ヲ奏ス其後二神自ラ海内ヲ巡行シ土地ノ

宜キヲ相テ温泉ヲ建給フト云フ蓋シ之ヲ本邦温泉療法ノ
濫觴トス然レヒ神代固ヨリ邈カナレハ其事蹟ノ詳ナルコ
トハ得テ稽フ可カラズ厥後中古ニ至レハ八皇卅五代舒明天
皇ノ御宇三年九月攝州有馬ノ温泉ニ行幸シ同年十二月還
幸アリ其後孝德帝モ亦此温泉ニ行幸アリシコト舊記ニ見エ
タリ是レ距今一千二百四十五年前ノ事ナリ又日本紀ニ曰
天武天皇七年異本持統天皇 十一月己亥 支干 遺沙門法員善 七年ニ作ル
住眞義等試飲近江州益須郡都賀山醴泉諸疾病療差者衆ト
是ニ由テ觀レハ抑病者ノ温泉ニ浴スルコトハ本邦ト雖既ニ
神代ヨリ創マリ且冷泉ヲ内服スルコトモ亦一千年ノ古ヨリ
傳來セシコト知ルヘシ又支那ニ在テハ事物紀源ニ云秦始
皇與神女遊忤其旨唾之生瘡始皇怖謝乃爲出温湯洗除後人
因以爲驗秦始皇砌而起宇漢武帝加修飾焉ト然ラハ漢土ト
雖ヒ亦二千餘年前ニ於テ已ニ温泉ノ名アルヲ知ルヘシ其
他秦以上ノ事ハ未ダ得テ攷フ可カラズ或ハ云夫ノ浴平沂
風乎舞雩ト曰フモ恐クハ温泉ナラント余未ダ其說ノ當否
ヲ知ラス姑ク錄シテ高明ノ評ヲ俟ツ然レヒ本邦ニテハ古
來格物究理ノ學ナキヲ以テ其効用ノ眞理ヲ推究スルコト能

ハス唯其實驗ニ據リテ之ヲ定ムルノミ漢土ト雖ヒ亦然リ
 是即チ方今倭漢共ニ尙未ダ温泉療法ノ闢ケサル所以ナリ
 歐洲ニ在テハ距今凡ソ二千三百年前醫聖依ト加得ノ時代
 ニ於テ鑛泉ノ療法始メテ起リ專ラ冷浴温浴瀉浴冷濕及ヒ
 濯水ノ法ヲ行フテ大ニ其効ヲ贊稱セリ然ヒ猶近代ノ如ク
 其鑛泉ニ含蓄セル氣類鹽分ハ未ダ之ヲ詳カニスル能ハス
 僅カニ其硫氣鹽氣銹氣及ヒ鹵氣當時ヨリ千六百年代ニ至
 ルマテハ之ヲ概ソ「ニト
 ルム」トアルヲ知レルノミ其後中古ニ至レハ鑛泉ノ療法
 漸ク衰ヘ時ニ列國爭擾ノ際ナレハ其暴舉壯麗ノ浴室ヲ毀
 ツニ至レリ故ニ鑛泉ノ當時世ニ存セシ者ハ僅カ「アーケ
 ン」「エムス」「カル、スパット」等ノ數泉アルニ過キス
 又其効用ヲ論スルニモ固ヨリ各泉ノ特効ヲ檢知スルコトナ
 シ唯概シテ諸種ノ慢性病ニ効アル者ト看做シ其實ハ專ラ
 病ヲ療スルカ爲ニ非ス唯富人娛遊ノ地タルニ過キサルナ
 リ然ルニ近代ニ至レハ既ニ一千四百年代ヨリ久シク世ニ
 廢レタル鑛泉ノ療法再ヒ興リテ其事ヲ推考シ夫ノ鑛泉中
 ニ含メル温素ハ全ク天然奇異ノ妙効アリテ固ヨリ人工ノ
 摸擬ス可カラサル者ト看做シ又其成分ハ金銀銅鐵或ハ磁

石ヲ蓄ム者ト謂ヘリ其後一千五百年代ノ季ニ至レハ化機
 分析ノ法ニ由テ始メテ鑛泉中ニ鹽類アルヲ知リ其後一千
 六百五十年ニ至リテ其鹽ノ瓦老醫鹽即チタルヲ發見シ
 芒硝又一千六百八十年ニ至レハ從來「ニトルム」ト稱セシ鹵分
 ノ炭酸曹達タルヲ曉リ次テ一千七百五十年ニ至レハ始
 テ温泉中ニ炭酸氣アルヲ發見シ又同時ニ於テ夫ノ喀啞
 加爾基略啞麻偏涅叟母等ノ鹽分モ之ヲ發見スト雖ヒ其各
 種成分ノ定量分析ハ當時未ダ闢ケス此ノ如キハ其後「ベル
 ゼリユース」氏「ストリユージュエ」氏等ノ功勞ニ由テ始メ
 テ之ヲ發見セリ以上記載スルカ如ク既ニ鑛泉中ノ含蓄物
 ヲ種々檢出スト雖ヒ尙一千七百年代ニ至ルマテハ其物ノ
 性質ニ從テ其効用ヲ論スルコト少ナク只舊來ノ實驗ニ據リ
 テノミ其泉ハ此病ヲ治シ其泉ハ彼病ヲ除クト言フニ過キ
 ス然ヒ唯、硫泉ノ疥瘡ニ効アリ鐵泉ノ身體ヲ強壯ニスル
 等ハ古來已ニ傳フル所トス現今ニ及ンテハ鑛泉ノ用法全
 ク面目ヲ一新シ其効用ヲ論スルニモ鑛泉中ノ氣類鹽分ハ
 勿論土地ノ高低燥濕向背林樹ノ疎密空氣ノ濃淡等ニ至ル
 マテ悉ク之ヲ詳察シテ後温泉ノ効用ヲ論定シ患者ノ病症

ヲ監ミ温泉ノ性効ヲ相シ症効相適スル者ヲノ其地ニ洗浴
セシムルニ至レリ是即チ西洋文明ノ益ヲ開ケテ益々世ニ裨
益アル所以ナリ

源泉湧出之理ヲ論ス

泉水トハ概シテ地下ヨリ湧出スル所ノ水ヲ云ヒ鑛水トハ
泉水ノ一種ニシテ其中ニ鹽分氣類等ヲ含蓄シ且其類ノ差
異ニ由テ各自病疾ヲ治癒スルノ功力アル者ヲ云フ
夫レ水ノ諸物ヲ溶解スルノ力ハ他ノ液類ニ卓越スルカ故
ニ純水ヲ得ルコト極メテ難シトス蓋シ純水トハ何ソ單ニ水
酸二素ノ抱合物ニシテ毫モ他物ヲ混セス無味無色無臭ナ
ル者ヲ云フナリ然ルニ純水ハ以上述フル如ク非常ノ溶解
力ヲ具有スルカ故ニ雨水蒸餾水ト雖モ亦多少不潔ナラサ
ルヲ得ス况ンヤ地下ヨリ湧出セル泉水河水ノ如キハ勿論
其中ニ鹽分氣類ヲ含蓄スルニ於テオヤ若シ又水ニ炭酸氣
ヲ混合スルキハ一層其溶力ヲ増加シ緻密ナル岩石ヲシテ
疎解分離セシムルノ性アリトス如此水中ニハ多少ノ混合
物アリテ其中ニ含蓄セル鹽分氣類ノ多寡一條ナラサレハ
尋常ノ泉水ト鑛水トヲ區別スルコト甚難シ是レ世人ノ常ニ

鑛泉水斥シテ其鹽分等ノ多少ニ拘ラズ概シテ之ヲ藥泉ト
唱フル所以ナリ

今若シ鑛泉湧出ノ理ヲ窮メント欲セハ須ク先ツ井泉湧出
ノ理ヲ明知スヘシ抑本邦ニ於テハ古來漢土ノ説ニ基キ雨
雪霜露河水海水共ニ之ヲ同一物トシ其源ヲ山ニ歸シ或ハ
之ヲ海ニ歸セリ但シ地下ニ水脈火脈金脈等アルノ説アレ
ト是恐クハ後世ニ起始スル所ナラン

歐洲ニ於テハ先哲「アリストテレス」氏曾テ云ヘルコトアリ
曰高山峻嶺ノ雲間ニ拔聳スル者ハ特ニ空中ノ濕氣ヲ吸收
シテ不斷其面ヲ濡潤スルノ力アリ故ニ山嶽ハ常ニ水氣ヲ
空中ヨリ聚メ以テ地面ノ下底ニ透徹セシムト蓋シ當時ニ
在テハ人皆之ヲ奇異ノ説ナリトセシカ近時果シテ其論ノ
確實ナルヲ證スルヲ得タリ又一千六百年代ニ當リ「カル
テシユース」氏ナル者泉水ノ淵源ハ海水ニアリトノ説ヲ
首唱シ其鹹味ヲ帶スシテ却テ淡泊ナル所以ノ理ハ海水
始メ地下ニ竄入シ而シテ後空洞ニ達シ其部ニ於テ地心ノ
熱度ニ逢ヒ變シテ蒸瀟トナリ昇騰シテ洞ノ穹隆ニ至リ再
ヒ結露シテ淡水トナリ遂ニ山腹ヲ貫キ流出シテ源泉ヲ爲

スト云へり又「ウヰトリユーヴ」氏ハ源泉ハ雨露ノ爲メニ出ル所トセリ又「ゲーレル」氏ハ「カルテシユース」氏ノ説ヲ駁シテ曰ク「カルテシユース」氏ノ云ヘル如ク若シ不斷海水ヲ蒸溜セハ之カ爲ニ残留スル所ノ鹽分ニ由テ乍チ彼ノ空洞ヲ填充シ了スヘシト又「キルレチル」氏ノ説ニ據レハ海水地下ニ透入スルノ理ハ細管引力ニ由ル者ト爲セリ然レモ細管引力ハ素ヨリ海水ノ鹽分ヲ漉過スルニ足ラス且之ヲ高地ニ上ホスヲ能ハサルヘシ又海面ヨリモ低キ地方ニ於テ必シモ海水來テ地面ヲ覆ハサルヲ以テ觀レハ此細管引力ニ由ラサルヲチ証徴スヘシ爾後「マリナツト」「ハルレー」ノ兩氏ハ雨露雪霜ノ全量ヲ算定シ因テ地上ノ泉水ヲ生スルノ理ヲ説明セシカ次テ「アラゴ」氏モ亦之ト同一旨ノ試験ヲ行ヒ益其説ヲ翼賛セリ乃チ其法ハ河水ノ海中ニ注流スルノ量ト山嶽平地ニ降ル所ノ雨雪ノ量トヲ比較スルニアリ又他ノ一方ノ海面ヨリ蒸發セル水分ノ量ト海中ニ流入セル河水ノ量トヲ比較スルナリ（其法ヲ略ス）又雨水地下ニ竄透シテ源泉ヲ爲スノ證據ハ霖雨ノ時ニ當リ水忽チ其量ヲ増加スルヲ以テ知ルヘシ又往昔

「アリステレス」氏ノ論述セル高山水ヲ吸收スルノ説ハ今時容易ニ其理ヲ詳悉シ得ヘシ抑高山ハ其温度平地ヨリモ低キカ故ニ空中ノ水氣必ス其面ニ凝結ス若シ山上ニ樹木蘚苔等繁茂スルハ其山麓益陰濕ナリ是他ナシ樹木ハ温熱ヲ放散シ其地ヲシテ寒冷ナラシメ且加フルニ蘚苔地面ヲ被覆シテ凝結セル水分ヲ保續シ之ヲ飛散セシメサレハナリ故ニ若シ山上ノ樹木ヲ伐除シテ之ヲ禿峯トナスハ澤水必ス乾涸シテ其下ノ水田モ亦全ク乾燥スルニ至ルヘシ但シ以上論載スル所ハ唯鑛泉ノ來由ヲ約説スルニ過キサルノミ

有機物ノ合成
東京大學理學部教授
松井直吉

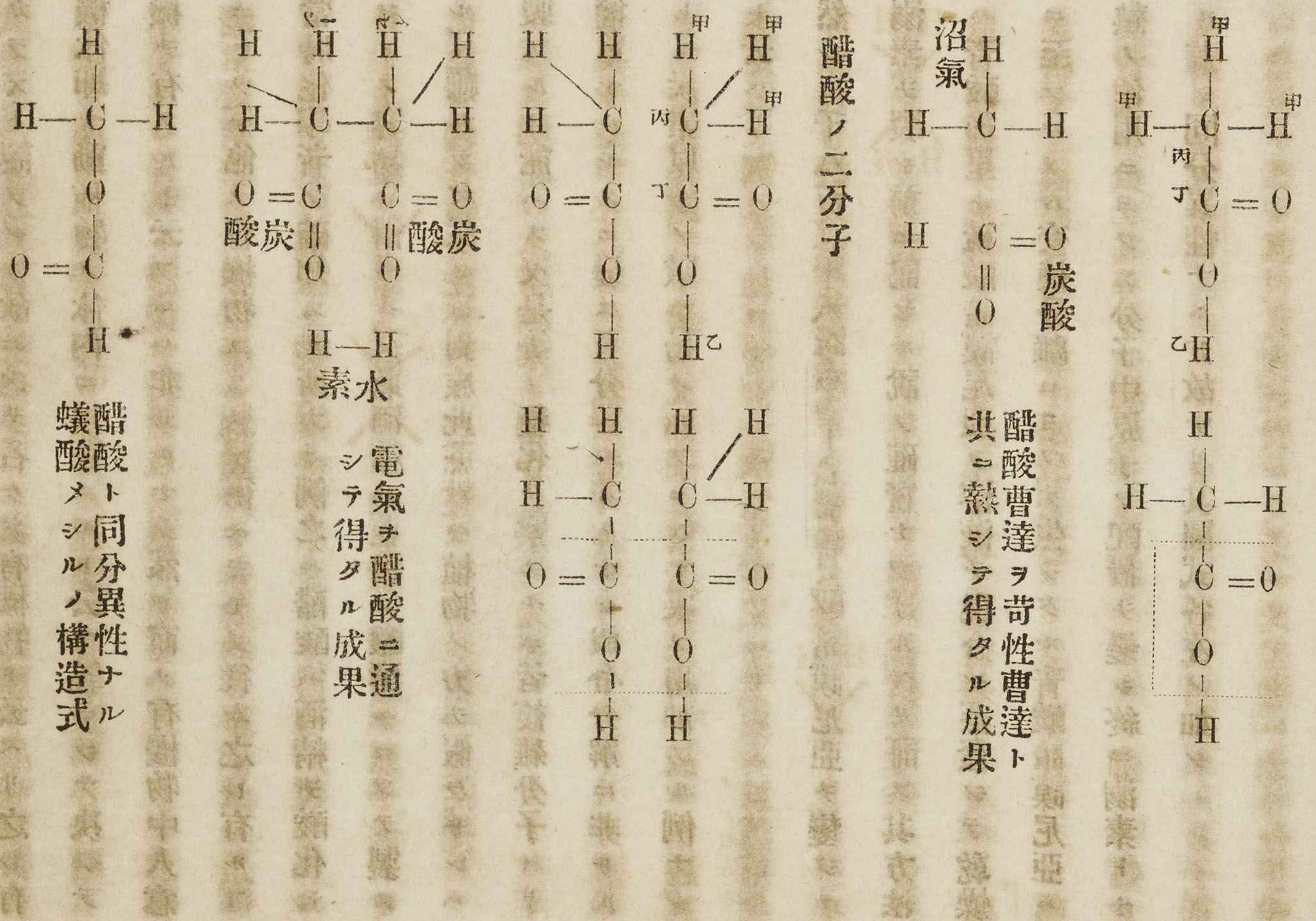
化學者物体ヲ分析シテ僅ニ六十有餘ノ單體ヲ發見セリ之ヲ元素ト名ク而シテ元素相和合シテ組成スルモノヲ化合物ト云フ然レハ宇宙間ノ物体總テ元素及ビ化合物ノ外ニ出デザルベシ又物質ヲ析斷シ極度ニ至レハ細微ノ一部分ヲ得ベシ之ヲ分子ト名ク是甚タ細微ナルモ其性質ハ概テ最初ノ物質ニ異ナラズ假令ハ錠ヲ以テ砂糖ノ小片ヲ破碎

原子ノ配置同一ナラザルニ由ル化學者之ヲ稱シテ同分異性トイフ故ニ何物ノ分子ハ何元素幾原子ヨリ成ルト云フ而已ニテ充分ナラズ一層之ニ精密ヲ加ヘ其分子構造ヲ知ラズンハ互ニ識別スルヲ能ハズ之レ化合物ノ構造ヲ尋究スルハ化學上甚緊要ナル所以ナリ今コ、ニ醋酸ニ就テ分子ノ構造ヲ定ムル一例ヲ舉ゲン元來此酸ハ通常酸類ノ如ク金屬元素ヲ以テ其水素ヲ轉置スレバ醋酸鹽ヲ生ズ而シテ斯ノ如ク排出サレタル水素原子ノ數ヲ檢スルニ一分子中決メ一ヨリ多キヲナシ是ニ由テ之ヲ觀レバ水素四原子ノ中只其一ハ他ノ三原子ニ異ナルヲ知ル又ガルヴアニ電氣ヲ通シテ此酸ヲ分解スレバ水素、炭酸、及ヒイセーソ₂(C_2H_6)トナル又醋酸曹達ヲ苛性曹達ト混シ烈シク熱スレバ沼氣(CH_4)及ビ炭酸曹達ヲ得ヘシ之ニ因テ考フレバ醋酸ノ構造ハ

$$\begin{array}{c} H & & H \\ | & & | \\ H-C & - & C-H \\ | & & || \\ O & & O \\ | & & | \\ H & & H \end{array}$$

ナルヲ毫モ疑ヲ容レズ如何トナレバ此式ハ左ニ示スカ如ク前記ノ反應及ヒ分解ヲ説明スルニ足レバナリ

醋酸ノ一分子



右ノ圖式中虛線ハ只分解ノ境界ヲ示スノミ甲甲甲ノ水素
三原子ハ皆同シク直ニ丙ノ炭素原子ニ付着スト雖ヒ乙ノ
水素一原子ハ之ト異ニシテ酸素ノ媒助ヲ得テ間接ニ丁ノ
炭素原子ニ付着セリ之レ醋酸鹽類ヲ生スル時ニ當テ金屬
元素ニ轉置セラル、モノナルヲ明カナリ

構造式ニ據リ茲ニ分子中原子ノ配置ヲ示スカ爲メ假ニ
之ヲ平面ニ排列スト雖モ固リ常ニ然ルモノニ非ズ又決
シテ動搖セザルモノト云フニハ非ズ只原子間化學引カ
ノ配置ヲ表スルノミ

前文ニ於テ分子ノ組成構造等本論ニ必用ナルモノ、大畧
ヲ述ベタリ今眼ヲ轉シテ當紀ノ初ニ遡リ化學ノ景況ヲ顧
ルニ無機化學ハ前紀中ラヴアラジエー、プリーストリー、
シール、等諸大家ノ研究ニヨツテ確實ナル基礎ヲ得タリ
ト雖モ有機化學ニ至ツテハ未ダ然ラズ漸ク萌芽ヲ出サン
トスル狀態ナリト云フニ決シテ誣言ニ非ルナリ當時ノ化
學者ハ動植物界ニ屬スル抱合物ノ組成甚ダ複雑ニシテ無
機抱合物ノ如ク元素ヨリ合成スル能ハズ且ツ尋常化學ノ
定規ニ從ハズシテ全ク生活力ノ作用ニヨラザレバ生ズ可

カラズト認メシガ故ニ之ヲ名ケテ有機物ト云ヘリ之レ有
機体即チ動植物ノ体内ニ現在スルト云フ義ニシテ決シテ
機ヲ有スルト云フニハ非サルナリ然リ而シテ有機物中人意
ニヨツテ他ノ有機物ヨリ製シ得ベキモノ往々之レ有ル
當時化學者ノ確知スル所ナリ例之ハ醋酸ハ酒精ヲ酸化セ
シメテ容易ニ得ヘシ又此酒精ハ蔗糖ノ醱酵ニヨツテ製ス
ルヲ難カラズ然レモ到底此蔗糖ハ植物ノ力ヲ假ラサレハ
製スルヲ能ハス又是等ノ變化ヲ察スルニ皆複雑分子ヨリ
簡單ナルモノニ變スル分解ニ非ルナシ假令分解ニ非サル
トモ炭素原子ノ數ハ始ノ如クニシテ決シテ増加スル例ナシ
ト云ヘリ

然レモ千八百二十八年少チーレル青酸諸謨尼亞ヲ變ジテ
溺素ヲ製シ前ニ記セル說ノ確實ナラザルヲ証ス其方法
ハ青酸加里ト硫酸諸謨尼亞ノ溶液ヲ混合シ蒸發シテ乾燥
ニ至ラシメバ交換分離ニヨツテ生シタル青酸諸謨尼亞ハ
熱ノ作用ニヨツテ分子中原子ノ配置ヲ變シ終ニ溺素トナ
ル蓋シ同分異性ナルガ故ナリ其圖式各左ノ如シ

青酸諸
謨尼亞



抑モ此溺素ハ恒ニ高等動物ノ尿液中ニ現在スル者ニシテ
 此時ニ至ルマデ全ク動物ノ力ニヨラザレバ製シ得可カラ
 ザリシガ故ニ此發明ハ前ニ記シタル生活力ノ説ヲ破壊ス
 ルニ足ルベキ者ノ如クナレバ當時ノ化學者ヲシテ未ダ充
 分ニ此感覺ヲ抱カシメザリキ如何トナレバ溺素ハ容易ニ
 水ト抱合シ直ニ分解シテ簡單ナル諸謨尼亞瓦斯及ビ炭酸
 トナリ且合成ニ必用ナリシ青素ハ未ダ曾テ此時マデ其組
 成元素即チ炭窒ノ二素ヨリ合成セシメ之レアラズ加之此
 ノ如キ例ハ長ク獨立シテ之ニ次ギシモノナキガ故ニ或ハ
 之ヲ無機有機兩界間ニ置キシ者アリシ其後十余年ヲ經テ
 コールベ及ビメルセンズ、ニ硫化炭素ヨリ間接ニ醋酸ヲ
 合成シ之ニ次デ又沼氣ヲ合成シタリ此時ヨリ有機物ノ合
 成大ニ進歩シフランクランド、ウルツ、ベルトロ、ウイリヤ
 ムハン、テキューレ、ホフマン等ノ諸家ノ研究ニヨリテ水炭
 化合物、酒精ノ類ヨリ脂肪、有機酸類ニ至ルマテ許多有機

物ノ合成ヲ遂ゲタリ就中其著シキモノハ蔞酸、蟻酸、酒石
 酸、琥珀酸、石炭酸、ヅハニリン、安息酸、枸橼酸、肉桂油、苦扁
 桃油、水楊酸等ニシテ此外古來未識ノモノニシテ合成ニ
 ヨリ始メテ製セラレ巴ニ大ニ世益トナルヲ鮮シトセズア
 ニリン色素、藥劑ノ如キ之レナリ現今ニ至ツテハ如何ナ
 ル複雑ナル有機物ナリト雖モ唯其構造ヲ判然ト決定スル
 ヲ得レバ其合成ハ又從ツテ容易ニ施シ得ベキニ至レリ
 又近年出版シタル有機化學書ノ分類ハ數年前ノ如ク動植
 兩界ノ出所等ニ因ラズシテ全ク分子構造及ヒ一般ノ性質
 等ノ理ニ本ケリ而シテ往時緊要ノ部ヲ占タル者ト雖モ其
 構造ノ未ダ明カナラザルニ由リ卷末ニ擯斥セラル、ニ至
 ル嗚呼此學ノ進歩盛ナラズヤ (以下次號)

支那紙幣史畧(第九號ノ續キ) 平 沼 淑 郎

抑モ韃靼ノ虜賊ハ支那ニ侵入セサル前ハ未ダ紙幣ヲ用ウ
 ルヲ知ラザリシ者ノ如シ范成大カ攬轡錄ニモ虜本無錢
 ト載セタリ是ニ由テ之ヲ觀ルニ虜支那ニ入テ後チ始テ錢
 幣ヲ用ウルノ便益ヲ覺知スルニ至リタルヲ明瞭ナリ故ニ
 史ニ虜賊ノ錢幣ノ事ヲ記スルハ金ヲ以テ始トス宋ノ末ニ

當リテ金人開封府其他國ノ諸部ニ闖入シ之ヲ見之ヲ傳ヘ
 遂ニ之ヲ實用スルニ至リタリ文獻通考ニ此ニ關スル事ヲ
 記シテ曰ク惟楊王亮嘗一鑄。正隆錢不ニ多餘。悉用ニ中國舊
 錢。又不レ欲留ニ錢於河南。效ニ中國楮幣。於ニ汴京ニ置レ局。
 造ニ官會。謂ニ之交鈔。擬ニ見錢ニ行使。而陰收ニ銅錢。悉運而
 北。過レ河即用レ錢不用レ鈔。鈔文大畧曰ニ南京交鈔。所準戶
 部符。尙書省批降檢會。昨奏南京置レ局印造ニ一貫乃至ニ二貫。
 例交鈔許レ人納レ錢給レ鈔。河南路官私作ニ見錢ニ流轉。若赴
 レ庫支取。即時給付。每貫輸ニ工墨費一十五文。候ニ七年ニ納
 換。別給以ニ七十ニ爲レ陌。偽造者斬。賞錢ニ二百千。前後有ニ戶
 部管當令吏官。交鈔庫使副書押。四圍畫ニ龍鶴。有レ飾。ト
 續文獻通考ニ據ルニ交鈔ノ始テ行ハレタルハ金ノ章宗ノ
 時ニ在リ又タ同書ニ曰ク海陵貞元二年遷都之後。戶尙葉
 松年請復ニ鈔引法。始置ニ鈔引庫及交鈔庫。(中畧)與レ錢並
 行。以ニ七年ニ爲レ限。納レ故易新。ト按スルニ當時交鈔ニ大
 鈔小鈔ノ二種アリテ大鈔ニ一貫二貫三貫五貫十貫ノ五等
 アリ又タ小鈔ニ百二百三百四百五百ノ五等アリタリ
 是時ニ當テ有司乞フテ七年釐革ノ法ヲ廢シ又タ文字磨滅

スルキハ各地所在ノ官庫ニ於テ兌換スルヲ得ルノ制度ヲ
 設ケタリ然ルニ官庫ノ吏員財政ノ正道定理ヲ辨ヘスシテ
 遂ニ知ラス識ラス收斂術ナキニ至レリ是ニ於テカ出ツル
 モノハ益々夥シクシテ入ルモノハ益々寡ク人民寢ク交鈔
 チ輕ノスルニ至レリ史ニ不能レ革レ弊亦始ニ于此焉ト言
 ヘリ當時ノ言ニ曰ク盜鑄頻行。百計流通。卒莫レ獲レ效。濟
 以ニ鐵錢。錢不可用。權以ニ交鈔。錢重鈔輕。相去懸絶。物
 價騰踴。鈔至レ不行。其間易ニ交鈔ニ爲ニ寶券。寶券未レ久更
 作ニ通寶。準レ銀並用。次ニ寶泉。以ニ印鈔。次織綾名曰ニ珍寶。
 珍寶未レ久後有ニ寶會。訖無ニ定例。ト以テ當時錢幣ノ狀態
 チ追想スルニ足ルヘシト云フ
 次テ元太宗ノ時ニ于元トイフ者アリ太宗ニ乞フテ交鈔ヲ
 行ハントシタルニ耶律蘇材トイフ者アリ議シテ曰ク交鈔
 チ印造スルニ決シテ萬錠ヲ過クヘカラスト太宗其議ニ從
 フ
 世祖中統元年詔シテ鈔法ヲ改正セシム、泰西ノ遊歷者マ
 ーコポロト嘗テ韃靼地方ニ至リ支那ニ入り皇帝ノ厚遇ヲ
 受ケタルト人口ニ膾炙スル所ナリポロト亞細亞紀行第二

篇ニ紙幣ハ桑皮ヲ取リテ以テ製スルコト及ヒ紙幣ノ天下ニ流通シテ更ニ遲滯スルナキヲ説キタリ蓋シ元ノ皇帝カ發行シタル紙幣ニ就キテ言フモノナリポロトハ其書中ニ皇帝ヲクブライカント言ヘリクブライカントハ即チ忽必烈汗ニシテ元ノ世祖ナリ故ニポロトカ紀行ハ總テ世祖ノ在位中ノ實況ヲ記シタルモノナルベシ讀者之ヲ參考スレハ亦タ當時ノ景況ヲ觀察シテ大ニ悟ル所アルヘシ又タパンチーヤガ出版シタルマコーポロト紀行中ニハマングカンノ事ヲ併記シタルヤニ覺ユ

抑モ元ノ紙幣初ハ大ニ便益アリテ民信亦タ厚カリシト雖ヒ歷代財政ノ針路ヲ誤リテ遂ニ宋末ニ均キ慘景ヲ呈出スルニ至レリ事頗ル繁衍ナレヒ之ヲ畢竟スルニ宋ノ覆轍ヲ蹈ミタルニ過キス仍テ予ハ敢テ之ヲ詳説セス元史中ヨリ左ノ一篇ヲ抄出シ以テ元朝紙幣顛末ノ一斑ヲ示サントス元史ニ曰ク鈔始ニ于唐之飛錢。宋之交會。金之交鈔。其法以物爲母。以鈔爲子。(中略)世祖中統中。始造ニ交鈔。又造ニ中統元寶鈔。又以ニ文綾織爲ニ中統銀貨。銀貨未レ及レ行。至元時添ニ造置鈔。(中略)按スルニ厘鈔ノ添造アリシハ實ニ我延元年中ニシテ南北兩朝互ニ神

器ヲ爭ヒ給ヒシ時ナリ然元寶交鈔行之既久。物重鈔輕。遂改ニ造至元鈔與ニ中統鈔。武宋(中略)又改ニ造至大銀鈔。元鈔法至レ是ニ變矣。大抵至元鈔。五ニ倍于中統至大鈔。又五ニ倍于至元。(中略)仁宗(中略)有下罷ニ銀鈔之詔。而中統至元ニ鈔。終ニ元之世ニ蓋嘗行焉。(中略)仁宗(中略)專用ニ至元中統鈔ニ云ト又タ曰ク順帝至正十年更ニ鈔法。(中略)鑄ニ至正通寶鈔。(中略)行之未レ久。物價騰湧。至レ逾ニ十倍。(中略)國用大乏。ト

(按スルニ武宗ノ世ハ我 伏見天皇永仁四年ヨリ花園天皇正和元年ニ亘リ仁宗ノ世ハ花園天皇正和二年ヨリ後醍醐天皇元亨元年ニ及フ順宗ノ至正十年ハ南朝 後村上天皇正平六年北朝 崇光天皇ノ觀應二年ニ丁ル)

予ハ續文獻通考ニ記セル左ノ數語ヲ以テ元朝紙幣顛末ノ批評ニ代ヘントス
草木子曰百貨出ニ之于貨輕之時。收ニ之于貨重之日。權衡輕重與時宜之。未レ有ニ不可行之理也。當時不レ知徒行ニ嚴刑。(中略)而鈔愈不レ行。
明太祖洪武八年。令ニ中書省造ニ皇明寶鈔。取ニ桑穰ニ爲ニ鈔料。抑モ太祖ハ英邁絕倫元ヲ滅シ虜賊ノ跡ヲ堂々タル中

華ニ絶チ鴻號ヲ四海ニ輝スニ至リテ紙幣ノ制度ヲ設ケタ
リ太祖元ノ弊ヲ殷鑒セサルニ非サルヘシ其意蓋シ彼カ長
ヲ取り弊害ヲ匡正シ禍害ヲ未發ニ防クニ在ルナリ而シテ
後世庸君暗主小人ト相謀リテ遂ニ禍ヲ釀シ再ヒ元國ノ覆
轍ヲ蹈ミ太祖ノ鴻緒ヲ紹恢シ其遺範ニ摸倣スルヲ能ハサ
ルニ至リシヲ奈何セン噫

リチャルドハツクルイト (Richard Hackluyt) ブリッセル、ナウイ カ重要ナル

航海記ゲイジョウウエーダテフ書ノ第二卷第六十葉ニ當時紙幣ノ價格ヲ載セ

テ曰ク五個紙幣(即チ絹布ノ切) 原書直譯)チ一「パリス」(Pari

ス)ト曰フ パリスノ語未ダ詳ナラス之チ英吉利ノ錢貨ニ

スレハ一「フロリン」半ナリ 一「フロリン」ハ現時ノ相場ニ

ベシ故ニ一「パリス」ハ大 又タ曰ク當時十若クハ十家チ以

抵我七十五錢位ナルベシ

續文獻通考ニ曰ク太祖洪武八年。令中書省造太明寶鈔。取桑穰爲鈔料。云々圖ニ

示スモノ是ナリ其制方高一尺濶六寸許。以青色爲質。外爲龍文花欄。横題ニ其額。曰

大明通行寶鈔。内上兩旁復爲篆文八字。曰太明寶鈔。天下通行。中圖貫貫。貫狀十串則

爲一貫。其下曰戶部奏准印造云々又圖中「イロハニ」欄内ニ第五圖ノ如キ印アリ

「ホヘトチ」欄内ニモ第六圖ノ如キモノアリ二圖中印造寶鈔局印大明提舉司印

テ一群 原書「ファイヤ」(Fico)ト言フ未ダ譯字ノ妥當ナル モノチ見ス故ニ暫ラシ群字ヲ以テ之ニ充ツ未ダ知

ヤ否ヤヲ ト爲シ一群毎ニ紙幣一「パリス」チ政府ニ收ム

是レ國王ノ法令ニシテ人民ノ義務ト爲レリ即チ其國人ヨ

リ聽キタル事ナリト蓋シフラーテル、オデリック、ド、フリ

ーニ、ガ實地經驗ノ說話ヲ記シタルモノナリ

有名ノ遊歷者兼文章家ソル、ジョン、マンドヴィルガ紀行

中ニモ紙幣ハ國王ノ擅ニスル所タリ云々ト言ヘリ蓋シ元

末ヨリ明ノ始ノ頃ノ事ナルベシ

其他明國紙幣ノ歴史ヲ按スルニ宋元兩國紙幣ノ履歷ト毫

髮モ差異アルヲナシ庶民泣飢政府乏財ノ慘景ヲ呈スルニ

至ルノ顛末ヲ記スハ實ニ贅言ナリト思考スルチ以テ茲ニ

暫ラシ明國紙幣史ノ論ヲ止ム

左ニ第四第五第六ノ三圖ヲ以テ明國紙幣ノ形狀ヲ示ス

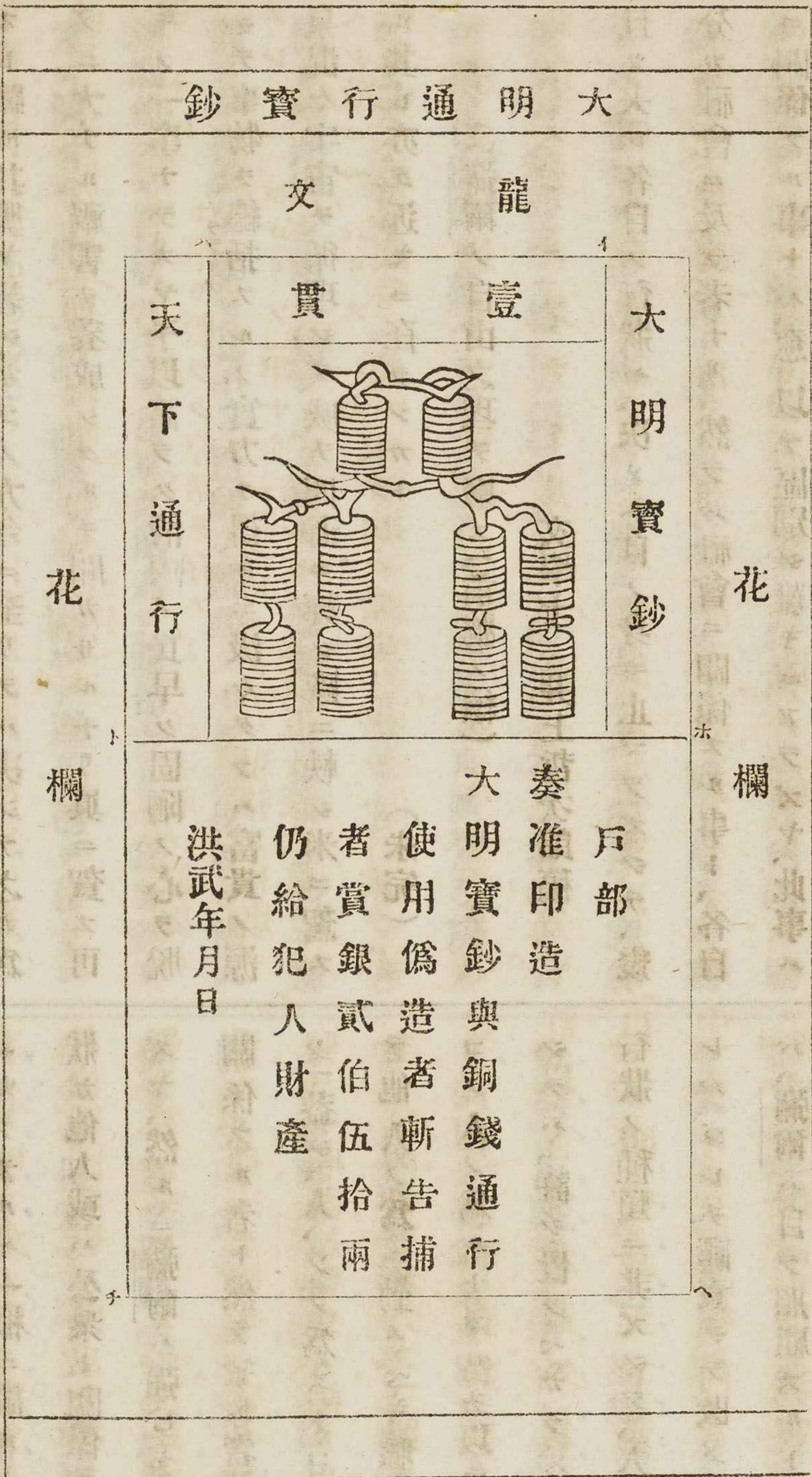
書省ニ造太明寶鈔。取桑穰爲鈔料。云々圖ニ

示スモノ是ナリ其制方高一尺濶六寸許。以青色爲質。外爲龍文花欄。横題ニ其額。曰

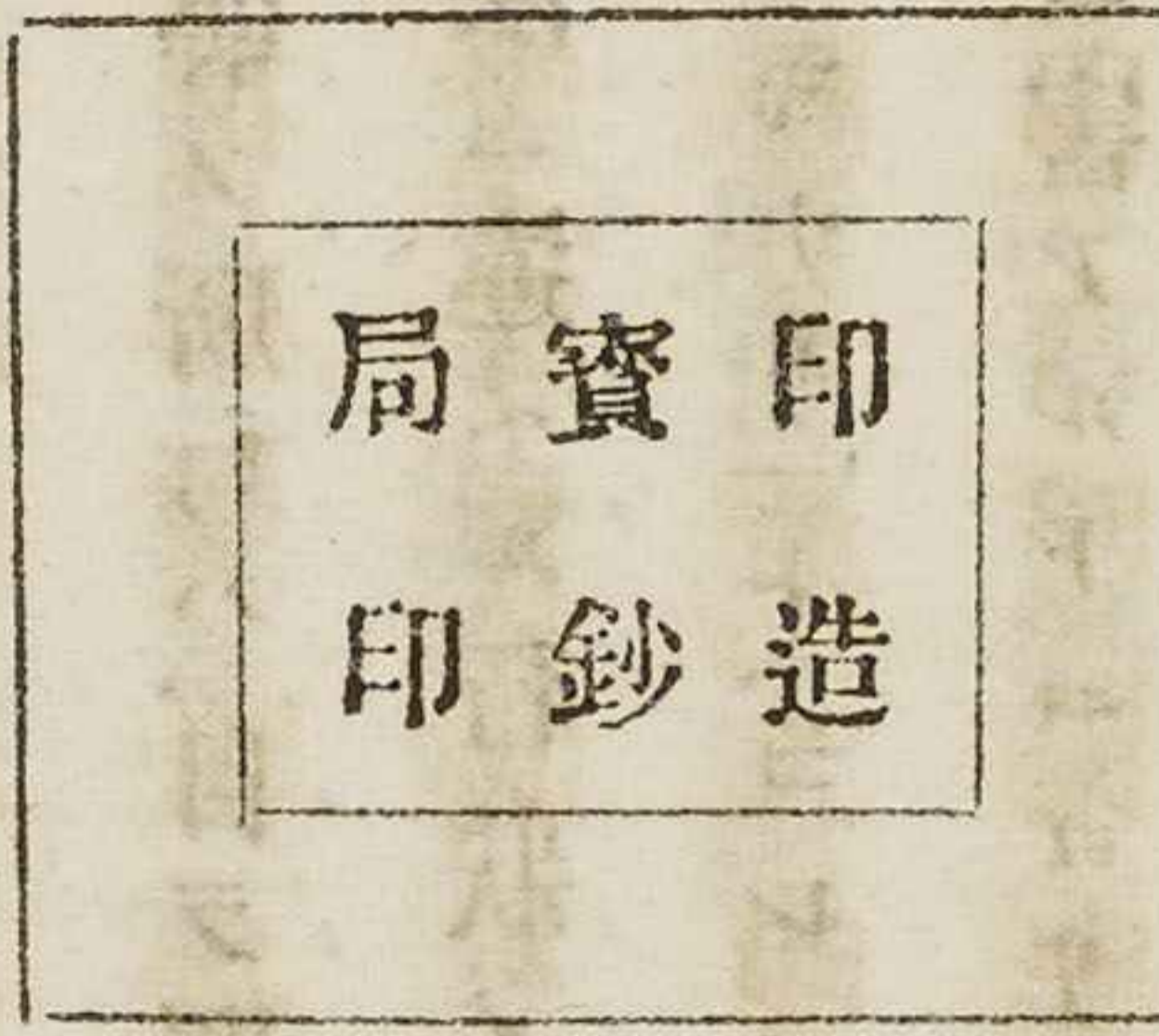
大明通行寶鈔。内上兩旁復爲篆文八字。曰太明寶鈔。天下通行。中圖貫貫。貫狀十串則

爲一貫。其下曰戶部奏准印造云々又圖中「イロハニ」欄内ニ第五圖ノ如キ印アリ

「ホヘトチ」欄内ニモ第六圖ノ如キモノアリ二圖中印造寶鈔局印大明提舉司印



第 四 圖



第 五 圖

此二個朱印ヲ畧



第 六 圖

ノ十二字皆ナ篆文ナリト知ルベシ(編者曰ク前圖中篆文ハ總テ之ヲ楷書ノ體ニ改メ龍文花文ノ如キモ之ヲ畧シテ畫カサルハ看者ノ見ルニ苦マンヲ恐ルレハナリ看者幸ニ之ヲ咎ムルヲ勿レ)

明國遂ニ又々境外ノ虜賊ノ爲メニ滅亡セラレテ堂々タル中華今日ニ至ルマテ夷狄ニ制御セラレ蠻賊ニ羈絆セラル是レ亦タ明國カ財政ノ定道ヲ忘レ錢貨ノ正理ニ乖リテ民心潰叛シ邦基紊亂シタルカ爲メナリトイフモ決メ過テリ

ト謂フ可ラサルナリ紙幣ノ禍害亦大ナラスヤ清國朱明ヲ滅シ全國ヲ平統シ世祖愛親覺羅福臨位ニ北京ニ即キテヨリ宋元明ノ禍亂ヲ鑒ミテ遂ニ全ク紙幣ヲ廢シタリ爾來百有餘年人皆ナ燦タル貨幣ヲ弄ヒ終ニ紙幣ノ何

タルヲ忘ル、ニ至レリ「シエスイツト」教法師ガブリエ

ト後チ二百年許商賈繁盛シ取引寫奕タルニ至リテ復タ紙

幣ヲ發行シテ世用ニ供シ今ニ至ルマテ終始變スルコトナシ

固ヨリ商賣上多少ノ變動ヲ醸成シタルコトナキニシモアラ

メニ大ナル禍害ヲ養成シタルヲ聞カサルナリ眞ニ賀ス可

キノ一事ナラスヤ予以謂ラク清國ノ民早ク固陋ノ心ヲ脱

シテ事物ヲ總括スルノ實力ヲ得ルニ汲々タラハ富貴ノ源

泉混々宇宙ヲ循環シテ威ヲ四海ニ輝シ歐ニ軼シ米ニ駕ス

ル其レ亦タ近キニ在ランカト

○彌爾ノ自由之理ヲ駁ス(前號ノ續)

文學士 井上哲次郎稿

彌爾モ思ヒ付キシト見ユ第四章ニ「凡ソ人自ラ一己ニテ

爲ストコロノ害、甚ダ他人ノコレト附近シ、利益ヲ共ニス

ルモノニ沾被シ、又大ニ總體仲間ノ上ニ波及スルコトアリ、

コレ實ニ然レドモ、一概ニ論ズベカラザルモノアリ」云云

(譯本第四卷十三葉)トアリ、是レ彌爾ノ反對論ニ答フル語

ナリ、然レモ余ヲ以テ之ヲ見レバ、彌爾ノ此言、頗ル窮スル

ニ似タリ、何ントナレバ、彌爾ノ言ヘルガ如ク、一概ニ論ズ

ベカラザルハ、一概ニ論ズベカラザレモ、然レモ一己ノ行

狀ガ他人或ハ公衆ト關係スト云フコトハ、矢張眞戒ニアラ

ズヤ、然ルニ彌爾ハ強ヒテ各自ノ行狀ヲ他人或ハ公衆ニ

且ツ夫レ各自ノ行狀ハ、決メ各自ノ身ニ止マラズシテ、幾

分カ社會ニ及ブ者ナリ、然ラバ社會ニ關係スル事ト、各自

ニ關係スル事トハ、愈以テ區別シ難キニアラズヤ、此事ハ

ハ、彌爾ハ自ラ照顧スルト他人ニ害アルトニヨリテ、行狀

レバ、コレヲ譴責シテ改メシムベキナリ」ト、コレニテ觀レ

バ、彌爾ハ自ラ照顧スルト他人ニ害アルトニヨリテ、行狀

チ二種ニ分ツ、然レハ他人ニ害ナキ行狀ト雖モ、他人ニ關係ナキコアラズ即チ或ハ他人チ益スベシ、或ハ他人チ益セズ、害セズ、但、感化スベシ、然ルニ若シ之ヲ間接ノ關係トセバ、余亦之ニ答ヘテ曰ハシ、凡ソ間接ト云ヒ、直接ト云フハ、皆度位ニ就イテ言フモノニテ、井然タル區分ハ、決シテ之ナキナリ、

然レハ此等ノ事ハ姑ク之ヲ置キ、彌爾ガイハユル自ラ照顧スル行狀ト雖モ其中ニ百般ノ種類アリテ、反リテ他人ニ關係スル行狀ヨリモ甚シク他人ニ關係スルヲ無キニアラズ例ヘバ、此ニ一個ノ碩學アリテ、道ニ遵ヒ、徳ヲ修メ、ニ、其行狀ハ最モ多ク、其身ニ關係スレハ、其他人ニ關係アルヲ、寒村ノ小民ガ他人チ折檻スルヨリモ甚シカルベシ、故ニ自ラ照顧スル行狀ト他人ニ關係スル行狀トハ決シテ分明ニ區別スベカラザルナリ、然ルニ彌爾ハ例ヲ舉ゲテ之ヲ説イテ曰ク「今コ、ニ一人アランニ、ソノ人放逸奢侈ニシテ、債欠チ負ヒ、コレヲ還スヲ能ハズ或ハ妻子チ養給スル能ハズ、ソノ兒子チ教育スル能ハザルトキハ、コノ人擯棄セラレ罰責チ受ルヲ、當然ナリトス、然レハコノ人ノ

罰責チ受ルハ、ソノ債主、及ビ妻子ニ向ヒ盡スベキノ本分チ欠タルコ由レリ、ソノ身ノ放逸奢侈ナルニ由ルニ非ズ、タトヒソノ一己ノ行放逸奢侈ナリトモ債欠チ負ハズ、兒子、教養ノ事等行届キタレバ固ヨリ、譴罰チ受クベカラザルナリ、譯本第四卷十四葉ト、是レ稍、詭辯ニ近シ、何ントナレバ、放逸奢侈ニシテ、他人チ害セザルヲアルベキカ、アルトハ思惟スベカラズ、然レハ是レハ假リニアリトスレバ、深ク尤ムルニ足ラズ、但、彌爾ノ如ク日常ノ行狀ニ就キ、此レハ自ラ照顧スルノ行狀、彼レハ他人ニ關係スル行狀ト一々區別シ來ラバ、煩瑣モ亦甚シカラズヤ、然レハ彌爾ハ別ニ各自ト社會トノ間ノ限界チ立ツルノ法チ見出タサルヲ以テ今ハ唯此煩瑣ノ事ヲ爲サザルベカラズ爲サレバ其最初ノ目的チ誤マルナリ即チ各自ト社會トノ間ノ限界チ立ツルノ法ハ之ヲ爲スヨリ外ニ最早之ナキニアラズヤ、然ルニ彌爾ハ僅カニ二三ノ例ヲ舉ゲ、巧辯チ弄シテ終ハラントス、何ゾ其窮スルノ甚シキヤ、彌爾ノ自由之理ヲ著ハスノ主意ハ、既ニ前ニ述べタルガ如ク社會ト各自トノ間ノ限界チ立ツルコアリ、然ルニ又

此ニ一步ヲ進メテ何故ニ彌爾ハ社會ト各自トノ間ノ限界
ヲ立テント欲スルヤト問フニ、蓋シ英國ノ民、日ヲ逐ヒ月
ヲ經テ、次第ニ開進シ、王權ヲ殺ギ、民權ヲ張リ、大トナク小
トナク、國家ノ事ハ多數ニヨリテ決セントスルノ傾向ア
リ、是ニ於テカ、彌爾以爲ラク多數ヲ以テ寡數ヲ制スルハ
矢張一ノ壓制ナリ、何ントナレバ賢哲ハ常ニ寡數ニシテ凡
庸ハ常ニ多數ナルカ故ニ多數ヲ以テ寡數ヲ制スルハ即チ
賢哲ヲシテ凡庸ニ從ハシムルナリ、故ニ多數ヲ尙ブノ弊
實ニ懼レザルベカラズト此ノ如ク彌爾ハ思惟スト見エ。

第二章(譯本第二卷)ニハ寡數ノ言、往々正ウシテ、多數ノ
說、往々誤レル事ヲ論ジ、以テ多數ヲシテ寡數ヲ制セシム
ルノ非ナルヲ説ク、而シテ其說、第三章(譯本第二卷)ニ至
リテ最モ詳審ナリ、然レハ彌爾ノ說、未ダ至ラザル所アル
ニ似タリ、何ントナレバ、寡數ノ言、往々正ウシテ、多數ノ
說、往々誤レルコトハ、勿論之アレハ、然レハ是レ格外ノ事ナ
ラズヤ、語ヲ換ヘテ之ヲ言ヘバ、多數ノ說、最モ誤リ少ウシ
テ、寡數ノ言、最モ誤リ多キアラズヤ、然ルニ彌爾ハ第四章
ニ「多數ノ說ヲ律法トシ、此ニ據リテ寡數ノ行狀ヲ制スル

キハ、正シキヲモアルベケレド誤リモ亦之アルヘシ(譯本
ニハ此處明ナラズ)ト云ヒテ。此難問ニ答ヘントス、然レハ
試ニ之ヲ思ヘ、假令ヒ多數ノ說ガ寡數ノ言ト一様ニ誤リ
多キモ寡數ノ言ヲ取ルヨリ多數ノ說ニ據ル方ガ公平ナル
ニアラズヤ、何ントナレバ、彌爾ノ自ラ唱フル所ノ功利說
ニ據リテ之ヲ言ヘバ、寡數ノ幸福ヲ求ムルヨリ多數ノ幸
福ヲ求ムルヲ以テ人生ノ目途トスベケレバナリ、然リト
雖モ、若シ寡數ノ言ト多數ノ說トチシテ兩立セシムルノ
法アラバ、之ヲ以テ最上ノ策トスルナリ、

又此ニ最モ疑フベキコトアリ、彌爾ハ異說ヲ非トスルヲ非
トシテ以爲ラク、非トスル所ノ異說或ハ是ナルヤモ知ル
ベカラズ若シ其是ナラザルヲ斷言セント欲セバ自己ヲ誤
謬ナキ者ト假定セザルヲ得ズ、然レハ世ニ謬誤ナキ人ナ
キヲ以テ異說ノ果シテ非ナルヤ否ヤハ未ダ確定スベカラ
ズ、故ニ異說ヲ非トスルハ非ナリト、今之ヲ本文ニ徴セン
ニ、第二章ニ「凡ソ異說ヲ禁ズルハ己ガ說ヲ謬誤ナキモノ
ト思ヒ、自ラ固ク信ズルナリ」(譯本第二卷三葉)ト云ヒ、又
「自ラ眞確ナリトスルトコロノ意見、イツクンゾ謬誤ノ意

見ナラザルヲ知ント、カク憶度スル人ハ寡シ、蓋シ始メ是

ナリト思ヒシ説、ソノ實ハ不是ニシテ、後ココレヲ悟ルコト、

ソノ例多クアリ」(全上)ト云ヒ、又更ニ其主意ヲ舉ゲテ「抑

壓セラル、意見ニ真理ナシト言ハ、コレ自ラ一己ノ説

ヲ謬誤アラズト擅ニ定ムルナリ」(譯本第二卷五十六葉)

ト云フ、是レ彌爾ノ説ナリ、彌爾ノ此説、決シテ謬誤トハ言

フベカラズ、然レモ此説ヲ持スル以上ハ彌爾ハ自己ノ説

ヲ以テ是ナリトスルヲ得ズ、若シ自己ノ説ヲ是ナリトシテ

異説ヲ非ナリトスルハ、忽チ自己ノ説ニ反スルナリ何ソ

トナレバ自己ノ説ニ異説ヲ非トスルヲ非トスレバナリ

然レモ彌爾ハ徹頭徹尾、自己ノ説ヲ是トシテ、他人ノ説ヲ

非トス、語ヲ換ヘテ之ヲ言ヘバ、自ラ異説ヲ非トスルヲ非

トスルノ説ヲ持シテ此説ニ反スル異説ヲ非トス、是レ豈自

家撞着ニアラザランヤ

前段ト同シ論法ニヨリテ之ヲ推スニ、彌爾ハ第二章(譯本

第二卷)ニ宗教ハ各自由ナルベキ者トシテ、互ニ干涉セ

シメザラントス、然レモ其レヲシテ互ニ干涉セシメザラ

ントスルハ抑壓ニテ互ニ干涉セシムルハ反リテ自然ニ任

スル理ナリ、然ルニ今彌爾ハ自己ノ説ヲ是トシ宗教ヲシテ

互ニ干涉セシメザラントスハ、抑何事ゾヤ、是レ本ト宗教

ヲシテ自由ナラシメント欲スル意ニ出ヅルト雖モ、然レ

モ其實ハ反リテ宗教ヲ抑壓スルニアラスヤ、若シ眞成ニ

宗教ヲシテ自由ナラシメント欲セバ互ニ排抵スルモ互ニ

親愛スルモ一切之ヲ自然ニ任せ決シテ彌爾ノ如ク當ニ斯

様ニスベシ當ニ斯様ニスベカラズ、杯ト命令ニスベカラズ、若

シ命令スレバ自由ノ理ト相反セザルヲ得ズ、然ルニ彌爾ハ

命令ハセザレド、第二章ニ論ズル所畢竟宗教ヲシテ互ニ

干涉セシメザラントスルニアリ、是レ宗教ニ對シテ當ニ

斯様ニスベシ、當ニ斯様ニスベカラズト命令スルニ異ナ

ラズ、故ニ余ハ彌爾ヲ以テ眞成ニ宗教ヲシテ自由ナラシ

ムル者ニアラズト信ズルナリ

今此篇ヲ終ハラントスルニ當リ、猶ホ此ニ辨ゼザルヲ得

ザルコアリ、彌爾ハ第四章ニ「人各々吾ガ心ニ誰某レノ會

社ハ、ソノ儀範談論等益ナクシテ害アリト思ハ、他人ヲ

儆戒シ、コレヲ避シムルノ權アリ」云云(譯本第四卷七葉)

ト云ヘリ、然レモ彌爾ハ己ニ第二章ニ於テ如何様ニ彼レ

ハ益ナクシテ害アリト思フモ、全ク自己ノ謬誤ナルコトアルガ故ニ、自己ノ異見ヲ以テ彼レヲ障碍スルノ權ナキ意ヲ述ベタルニアラズヤ、但、第二章ニ論シタル所ハ、主トシテ宗教上ニ向ケタレド其理ハ此條ト異ナルヲ見ズ、果シテ然ラバ彌爾ノ此說ハ前後矛盾セル者ニアラズヤ、又彌爾ハ第四章ニ「思慮ノ缺少ヨリシテ、自己ノ尊威ヲ失ヘルモノハ、他人ノ權利ヲ侵シテ、該當ノ罪ヲ得ルモノニ比スレハ、大ナル殊異アルコトナリ、故ニ思慮ノ缺少セル人ニ向ツテ、吾等性情ノ發スルコト、吾等行狀ノ仕向、大ニ他人ノ權利ヲ侵ス人ヲ待スルトハ異ナリ」云云（譯本第四卷九葉）ト云ヘリ、是レ何等ノ論法ゾヤ、夫レ尊威ヲ失ヘル者ハ思慮ノ缺少ニヨラザルハナシ、思慮十分ニシテ尊威ヲ失ヘルコトアリヤ、若シ夫レ生ナガラニシテ尊威ナキ者ハ、尊威ヲ失ヘルニアラズシテ、始メヨリ尊威ナキ者ナレバ、是レハ格別ノ者ナリ、一旦尊威ヲ有シテ後之ヲ失ヘル者ニシテ、思慮ノ缺少ニヨラザル者アリヤ、又思慮ノ缺少ヨリシテ尊威ヲ失ヘル者ハ、他人ノ權利ヲ侵セシ者ニ比スレバ大ナル殊異アルコトナリト云ヘド、余ハ未ダ此ノ如キ殊

異アルヤ否ヤチ知ラズ、且ツ夫レ他人ノ權利ヲ侵スモ思想ノ缺少ニヨルニアラズヤ、又一步ヲ進メテ之ヲ疑フニ、自己ノ尊威ヲ失ヘルトハ、抑、如何ナル事ニヤ、彌爾ガ第四章ニ述ベタル所ノ旨意ニヨリテ之ヲ言ヘバ、如何様ニ自己ノ尊威ヲ失ヘルト思惟シテモ、全ク謬誤ナルコトアルニアラズヤ、實ニ此文ノ如キハ、曖昧糊塗、余其何ノ意ナルチ知ラズ、此外疑ハシキ所少シトセズト雖モ、議論頗ル煩瑣ニ涉ルノ恐アルヲ以テ、暫ク筆ヲ此ニ擱シ以テ來哲ノ辨論ヲ俟ツト云フ、

雜 錄

虎列狼病談 理學士 谷田部梅吉述

余西書ヲ閱シ此疫ノ嘗テ殆ト全地球ニ蔓延シ殘虐ヲ極メタルヲ看テ悚然トシテ其兇惡ナルニ愕キ之ヲ抄譯シテ以テ本誌ニ載ス蓋當時ノ狀況ヲ記述セル先輩ノ譯書ナキニアラザルベシトイヘトモ惡疫流行ノ今日ニ方リ更ニ其慘狀ヲ略記シテ病勢ノ如何ヲ江湖ノ一覽ニ供スルハ亦無用ノ業ニアラザルヲ信ズルナリ但其病理、症

狀、療法等ヲ論スルハ世上自ラ人アリ故ニ余輩爰ニ之ヲ贅セズ

コレラ一名コレラ、モルブス病ニ一種アリコレラ、スボ

ラチック(單行コレラノ義)又ハ西方コレラト唱フルモノ

其一ニシテコレラ、エビデミック(傳染コレラノ義)又東方

コレラト呼ブモノハ即チ現今流行ノ傳染コレラ病ナリ

コレラ病ハ其甲種ナリ乙種ナルヲ問ハズ暴吐暴瀉痛苦衰

弱四肢ノ冷却等ヲ以テ其症狀ト爲ス但甲種ハ一個人ノ病

ニシテ他ニ傳染セス即チ我國ノ霍亂ニ外ナラズ乙種ハ傳

染病ニシテ俗間嘗テ之ヲ三日コロリト稱ヘタリ

東方コレラ一名亞細亞コレラハ殆ド百年ノ前ニ於テ端

チ印度ニ發シ一千七百七十三年以降三年間一千七百八十

一年同八十七年後又屢々流行セリ惟其病害未タ甚人心ヲ

恐怖セシムルニ至ラサリシモ一千八百十七年(我文化

十四年)八月ベンガル州(印度士坦地方)ノカルキッタ府

ヨリ四十里隔リタルゼンル市ニ發セル惡疫十數年ニシテ

殆ド全地球ニ瀰蔓シ九百萬人ノ生命ヲ絶チシヨリ以還醫

士學者ハ先チ爭フテ其病理ヲ研究シ其治術ヲ丹練シ世人

ノ之ヲ怖ル、コトハ虎狼モ當ナラズコレラノ一聲克ク兒童ノ泣チ止ムルニ至レリ而テ造化ノ幽微ハ人間ノ容易ニ探知シ得ベキニアラズ悲哉未タ萬世不易ノ治方、病因ヲ發見セザルナリ

ゼンル市ニ發セルコレラ病ハ直ニダッカ、ヂナボル、カルキ

ッタ(皆ベンガル州内ニアリ)ノ諸市ニ傳播シ翌年ボム

ベー府マドラス府(甲ハ印度斯坦ノ西岸ニ在リ乙ハ其南

東岸ニアリ)ヲ襲撃シ翌年則チ一千八百十九年ニ至リテ

西蘭島及ビモオリス、ブルボンノ諸島(マダガスカル島ノ

東隣)ニ達シ同二十年二十一年ニ於テベルシヤン灣沿岸

ノ都市ハ悉其災ニ係リシイラ、イスパアン、ラヌラン(ベルシ

ヤ國)ノ諸府共ニ之ヲ免ル、チ得ズシテ延テアルメニヤ

全州ニ散布セリ而テベルシヤ國ノ海濱ニ於テハ五十六日

間ニ六萬人ヲ斃シパッサラ市ニ於テハ五萬人ヲ殺セリト

云フ

一千八百二十二年惡疫チダリス、ユッフレットノ河畔ヲ溯リ

アレツボ市(シリヤ州)ニ現レ同二十三年遂ニ魯西亞國ニ

達シセオルシヤ、シルカシヤ兩州ノ諸港ヲ侵セリ斯數年

間亞細亞ニ於テ既ニ概計二百萬人ヲ斃セリト云フ
 其原因ハ得テ知ルベカラズトイヘトモ惡疫爰ニ至リテ姑
 其歩ヲ駐メ歐州ニ入ラザリシコト數年一千八百二十九年
 ニ及ビテ復コカス山下ノチフリ市ニ出現シ尋テアスト
 ラカン市ニ傳リ翌年結商隊ノ傳送ニ由リテオレンブルク
 府及ビモスコオ府等ヲ蹂躪シ同三十一年ニ於テセントペ
 テレスブルク府ポトランド國ノウアルソウイ府(五月)ヘル
 リン府、ハムブルク市、カンデルランド市(十月)等ニ流行
 シ同三十二年遂ニ龍動府及ビ巴里府ニ達セリ而テ其翌年
 病魔大洋ヲ濟リテ亞米利加洲ニ到リ墨西哥國其他ノ諸國
 ニ散蔓シ其猛毒ナルコト曾テ亞歐兩洲ニ讓ラザリキ
 上ニ述ブルトコロハ惡疫進路ノ西セルモノナリ其東セル
 モノハ暹羅國シヤウア島マニラ島ニ涉リ支那ニ蔓リ而テ
 一千八百廿一年(文政四年)本邦モ亦此災ニ罹レリ
 斯クシテ年ヲ歴ルコト十有七年ニシテ疫病殆ド全地球ヲ
 經過シ人ヲ殺セルコト概計九百萬人ニ上レリト云フ(亞
 米利加日本等ヲ算入セルヤ否之ヲ識ルコトヲ得ズ)
 爾來一千八百四十九年及ビ一千八百五十三年ニ於テ又歐

州ニ流行セリ本邦安政五年(一千八百五十八年)ノ流疫ハ
 普ク諸道ニ傳播シ其猖獗ニシテ殘虐ヲ逞フセルコトハ實
 ニ今人ノ知ルトコロナリ余未タ其出所來所ヲ聞カズ
 コレヲ病ノ害狀ニ關シテ觀察實驗セルモノ少カラズ就中
 其最重要ナルハ流行ノ日數短キトキ病人ノ少數ナルトキ
 及ビ流行ノ始ニ方リテ病人ノ割合ニハ死人ノ多數ナルノ
 一事ナリ蓋右ノ如キ場合ニ於テ疫病ニ罹ルモノハ主トシ
 テ老衰疲勞不養生等ノ事由アリテ最厲疫ニ感シ易キ人ニ
 シテ且十分ノ豫防ヲ盡スノ時日ヲ得ザルコト幾分カ其原
 因タルハ疑ヲ容レザルナリ
 頃日長崎ニ遊シ際全國陶工業ノ一二ニ位スル肥前有田
 郷ノ起緣並陶器製法ノ概略記ヲ得タレハ錄シテ以テ諸
 彦ノ一覽ニ供ス
 枕石散人記
 肥前國佐賀ヲ距ル西十一里ニ郷アリ有田ト云フ現今戶數
 千百七拾有餘人口五千四百二拾餘其村落ヲ小區分シ泉
 山、上幸平山、大樽山、本幸平山、赤繪町、中野原町ト云フ陶
 工百二拾五名磁器ニ裝色スルモノ拾六名其他皆製造描畫

ヲ以テ業トシ陶工ニ附属スルノ諸雜工凡千五百六十二口
 蓋泉山、上幸平山ノ奈長茶碗大樽山、本幸平山ノ井ト自ラ
 區別ヲナセリ慶長年中征韓ノ役我軍ニ從ヒ渡來セシ韓人
 李參平ナル者初テ白堊ヲ泉山ノ地ニ得磁器ヲ製シテヨリ
 遠近坵埴ヲ能スルモノ相率ヒ來聚テ一村ヲナシ人種漸
 ヲ繁植シ文化己巳ノ年ニ至テ陶工百八拾余名ノ多キニ及
 ヒ爾後屢沿革アリ今百二拾五名アリト雖モ現ニ其業ヲナ
 ス者僅ニ八拾四名ノミ此外黑牟田山、應法山、南河原山、廣
 瀬山、大河内山、一ノ瀬山之外山ト呼ヒ吉田、小田、志弓、
 野山野内、志田、東西山ノ如キ之ヲ大外山ト名ケ總テ此十
 二ヶ處ハ皆有田郷ニ附属セリ
 往昔有田ヲ田中村ト稱セリ韓人李參平ノ我土ニ歸化セシ
 所ハ舊藩多久氏ノ軍ニ從ヒ來リタレハ其邑多久ニ在テ坵
 埴ヲナセリ其跡今ニ存ス 大口山、高麗谷、唐人小 最後ニ有
 田郷亂橋 有田ヲ距ニ來リタレハ良質ノ土ヲ得ル能ス稍溪
 間ニ遡リ今ノ有田ノ地ニ於テ所々試堀シタリト 天駒谷 于
 今土人往々地中ヨリ器物ヲ得ルヲアリ是レ皆土器ノミ間
 ニ白磁器アレハ其質粗惡ナリ嘗テ泉山ヨリ白堊(白色ノ

陶土ヲ云)ヲ得ルニ際シ製陶器ノ術モ進ミ巧ニ製作スル
 ニ至レリト云フ伊萬里人東島德右衛門ナルモノ長崎來舶
 ノ總管ニ授リシ彩畫裝色ノ法ヲ以テ年木山ニ住セル喜三
 右衛門ニ謀リ試験セシカト成ラズ終ニ吳洲權兵衛ト共ニ
 多年ノ實驗ヲ經テ發明スル所少ラズ金銀泥等ノ燒附ハ此
 時ニ始レリ是ヲ長崎在住ノ清人蘭商ニ售ク之ヲ外國
 ニ賣與スル嚆矢トス 正保三年壬辰 六月月上旬ナリ 其後中野原町長右衛門
 吉太夫等屢長崎ニ往來シ清人蘭商ニ貿易ヲ始メシヨリ裝
 色ニ從事スルコトハナレリ此時豪商富村勘右衛門長崎ニ
 於テ大ニ磁器ノ販賣ヲナシ彩畫ノ大壺ノ如キハ當時ニ製
 シタルヲ始メトス同氏ハ罪アリ享保庚子年ニ屠服セリト
 其後ハ人々競テ相齎シ貿易猥雜販賣終ニ行レズ稍衰微セ
 リ安永年間長崎奉行天草ニ於テ磁器ヲ製シ外國ト貿易ヲ
 盛ニセント企リ此時ニ當テ裝色ヲナシ得ルモノ僅ニ十六
 名ナリシ此等ヲ雇ヒ陶工ニ從事セシメタルカ裝色法ヲ
 他ニ傳フコトヲ恐レ新ニ令シ制禁數ヶ條ヲ約シ其附属セル
 雜工ト雖モ妄ニ他出スルヲ嚴禁セリ故ニ今ニ於テモ此十
 六名ノ外一戸タリハ増減ヲナサズ天保壬辰年久富與次兵

衛長崎ニ至リ再ヒ貿易ヲ起ント百方相謀リ漸ク蘭商ノ委
托ヲ受ケ極薄ノ壺皿猪口ヲ製シ而シテ泉山釉藥ノ如キハ動
スレハ稠厚ニシテ數回之ヲ撈過セサルヲ得ス因テ平戸ニ
存在セルモノハ再度ニシテ可ナリノモノヲ得ルト聞キ竊
ニ之ヲ求メ試シニ果シ人工ヲ省ク最モ多クハ人々相傳
テ他器ト雖モ之ヲ施スニ至リ現時五島釉藥ノ行ル、ヤ之
ヲ以テ權輿トス大小花瓶ノ如キモ此時ヨリ製造シ漸々進
歩シ終ニ今日ノ隆盛ヲ見ルニ至レリ

寛文中仙臺ノ伊達氏江戸ノ商伊万里屋五郎兵衛ナル
者ヲ此地ニ遣リ磁器ヲ造ラシム滞在凡ソト二歳ニ及ヘ
凡ソ適意ノモノヲ製スル能ス故ニ上幸平山辻喜左衛門カ
最後ニ製シタル磁器ヲ齎シ歸リ伊達氏ニ贈レリ其器傳
播シ終ニ京師ニ獻スル所トナリ其清潔ナルヲ尊重セ
ラレ以後内廷ニ調進スヘキ命ヲ蒙リ辻氏年々獻納シ來
リ其孫喜平次ニ至リ安永庚午年六月常陸大掾ニ拜命ス
喜平次頗ル陶工ヲ能スルノ名アリ或日窯戸ヲ發キタル
ニ磁器ノ苦窳ナルモノ壺ヨリ落チ他ノ器ニ抱合セルヲ
見之ヲ壞ケハ中ニモ亦一箇ノ磁器アリ瑩滑他ノ比類ニ

非ス此ニ於テ大ニ發明スル所アリ更ニ器ヲ製シ中ニ精
巧ノ磁器ヲ安シ蓋メ其合スル所ニ撈過セリ然ルニ火度
盛ナルニ及ソテ熔解吻合シ外間ノ火氣ヲ受ケス中ニ在
ル所ノ磁器透明瑩滑他器ニ倍ス今之ヲ名ケテ極眞ト云
フ又燒附帽子トモ云フ又タ一種其合スル所ニ撈過セサ
ルモノアリ之ヲ帽子入リト云フ然リト雖モ其品類ハ第
二等ニ屬シ是皆喜平次ノ發明ニ係レリ

陶土石品類並用法

繪藥ハ明世浙江省ノ衢州江西省ノ廣信府等ニ出ルト云フ
今衢州ト建州間ニ産スルナラン長崎ニ在ルモノハ舶來ニ
シテ其色暗黒翠色ヲ帶ヘリ之ヲ小瓶ニ入レ封シテ素燒窯
ニ煨クキハ上料ナレハ精好ノ翠色ヲ發シ下料ナレハ土褐
色ヲ顯セリ概テ之ヲ三種ニ擇分ク磨臼ニ挽キ其泥ヲ煎茶
汁ヲ以テ粘リ而シテ水ニ混和シ之ヲ澄スル六時間別ニ凝水
石ヲ貯ヘ其上汁ヲ移シ之ヲ澄セハ粗ナルモノハ沈ンテ器
底ニ止ル此ノ如クスルヲ凡五六度其細末ナルモノヲ採リ
水飛スルヲ又四五度ニ凝水石ヲ去リ而シテ磁器ニ描畫ス
濃淡意ニ隨ヒ水ヲ投スルノミ

釉藥其色白堊ニ同シ之ヲ水確ニテ舂キ水ニ混和シ極テ細

末ニ篩過シ以テ大瓶ニ貯ヘ柞灰ニ調和ス（柞灰ハ薩摩ニ

製スルモノヲ最良トス日向ノ鈣肥、肥後ノ球摩等ニモア

リ薩摩産ハ御手山ヲ以テ好トス）始メ灰ヲ以テ地ニ撒布

シ中央ニ炭火ヲ發シ熾ナルニ及ンテ餘ル所ノ灰ヲ以テ炭

火ヲ埋メ堆ク山形ヲ作り時々之ヲ撥ケハ温氣灰中ニ充テ

滿山火トナル此ノ如キ凡ソ二日火氣全ク消滅スルニ至

テ止ム而シテ水ニ混和シ篩過シテ大瓶ニ貯フ其調和法ハ素

燒ノ碎片ヲ以テ一テ灰汁ニ浸シ他ヲ釉藥汁ニ浸ス其汁碎

片ニ糊貼スルヲ小刀ニテ切斷シ其厚薄ヲ比較ス厚キモノ

ヲ濃トシ薄キモノヲ淡トス之ヲ切合セト云ヒ以テ釉汁ト

灰汁ノ分量ヲ測ル

瑠璃磁器ノ如キハ之ニ繪藥四分ヲ加ヘ以テ磁器ニ透過

ス五島ニ産スル釉藥ヲ五島藥ト云ヒ其質極テ乾燥シ易

シ泉山釉藥ノ如キハ磁器ヲ以テ之ニ浸シ其乾燥スルニ

及ンテ之ヲ小車上ニ置キ釉藥筆粗ニシテ以テ之ヲ抹ス

ル再度五島藥ハ再ヒ之ヲ浸シ可ナリ故ニ人工ヲ省ク最

モ多シ當時專ラ泉山釉藥六分五厘ニ五島釉藥三分五厘

ノ分量ヲ調和ス

藤津郡嬉野岩谷河内ノ溪間ニ在ルモノハ其質五島産ニ

均ク之ヲ採集スルニ道路モ亦タ甚タ便利ナル地ナリ

青磁聖場ハ泉山白堊場ト相對シ峙立ス溪間一條ノ間道ヲ

隔ルノミ是ハ白堊ニ比スレハ堅剛ナリ之ヲ採リ舂キ灰汁

ニ調和スル釉藥ニ異ナラス之ヲ磁器ニ透過スレハ青色ヲ

發ス若深青ナラシメント欲セハ勉テ厚ク透過ス可シ

碎磁器ノ土ハ白川山ニ産シ白石ナリ南河原山ニ産スルモ

ノハ黄土ニシテ赤輝ト云フ之ヲ採リ舂ク白堊ニ同シ其汚瀝

ヲ水飛スルニ及ンテ白堊粉二分ヲ加ヘ以テ粘貼ナラシム

其磁器ヲ製スルニ當テ破裂セシトテ恐ルレハナリ之ヲ本

窯ニ置キ元來五杯調和（調和法後ニ記ス）ヲ本位トスレハ

四杯ヲ以テ調和シ之レニ透過シ火度ヲ過ノ破裂ヲ促シ燒

ルニ隨ヒ磁器若干分ノ容量ヲ減ス故ニ表面ノ釉藥破裂シ

水紋ヲ顯ス此水紋ニ細大二様アリ漢土之ニ魚子蟹爪ノ名

ヲ與リ

○月前子規山由武谷對某事久時米幹不文不賦

海神の波もてゆへる。淡路島あらま磯わに船よせて風

まもらへり。居待月、あけの門波。しほさるの、伊豫よめ
ぐりて。さ夜中と、影ふけぬらし。瀧の上の、淺野を出る、は
と、ささ、とよもを聲よ。梶枕、ゆめさめてみれり。有明の、
庭もしつけし。いまのこき出る。

反哥

はとよきと、かゝるかさそり。鳥つたひ
沙よあかる、月よ見まゝや。

○余カ友西氏ノ家ニ古ヨリ傳ヘタル木村重成ノ遺墨ア

ト云フ余偶之ヲ見ルニ一字一涙以テ長州ノ忠勇節烈

貫日ノ如キヲ知ルニ足レリ乃チ之ヲ登錄シテ江湖ニ

示ス之ニ附記スル所ノ長篇一首ハ文字拙劣思藻野鄙

出タルモノナレハ諸君幸ニ之ヲ恕セヨ 磯野竹翠識

一書令啓上候先以貴所疵痛如何被成候哉朝夕無心元存

暮候御聞及茂可被成一圓不得寸隙心外之至奉存候御

末城中之有様墓々敷体も無之兎角天下者家康と存る事ニ

御座候昨夕も石川肥後守(此所不知)陣家へ忍ひ參候石

川も我等同服中ニ而城中の評議御母公下知ニ而手前手

配り一圓承引無之由尤ニ存候某事昨朝七ツ時不蒙下知

茂嶋野へ罷出心際之働諸人目を驚し候兎角一日早々討

死と覺悟極候貴所儀も昨朝之籠城其上數ヶ所は深手御

負候間無油斷早々在所へ御引込御尤も存候誰進も嘲

候もの有間敷我等儀家康懇意之筋目故板倉伊賀守より

度々内意申越候へ共當君へ被附候二心非本意聊以面目

其と不存候へ共人家(陣家歟原書のまゝ)月日を送し無
是非事も御座候然者此香爐姉君へ御届可被下候扱此太
刀の家康よと我等十三歳之元服之祝儀として給候使者
御の本田平八口上よて家康秘藏之業物來國俊之よし申來
候我等此太刀はて數度之戰一度も不取不覺依之大波と
號し今日迄所持申候へ共貴所へ形見も進申候隨分御秘
藏可被成候

城中も有るから一時も心静し得御意候事も無之他人同
前之様残念千萬之至ニ候賑々姉かてる殿御うらみ可有
候此段ハ不私様宜敷御言分可被下候無是非事も候恐惶

謹言

五月五日 木村長門守

猪飼野左馬之助殿

御陳家

讀木村重成之尺牘書感

始皇死前既失鹿。始皇死後默可知。况又二世性不似。壁高溝深勢難支。大坂城中多少士。或為不平或為私。忠勇無雙長門守。獨濺熱血竭遺兒。豫期天下落敵手。從容結纓欲曝屍。屈膝老奸吾豈肯。寧忍偷生賦黍離。節義千秋推召忽。今人猶傳絕命詩。偶有故朋示墨跡。起剔短檠手自披。滿腔慷慨溢紙上。一字一行淚先隨。可憐猿面郎雄零壓四海。恰似春花發一時。長城萬里費民力。延攬人心敢不為。豐家末路秦覆轍。天下遂歸德川氏。往事茫茫三百載。青衫一夜感盛衰。激昂澆酒醉忠鬼。芭蕉葉破雨聲悲。

菊池三溪曰。起得堂々。

又曰。木村長州忠勇節烈。赫々照青史。與真田父子祖孫。相比較無少愧色。可謂傑作。又曰。結得。餘韵嫋々。

○月下聞杜鵑 竹翠漁史

懶把離騷對短檠。閑愁入夢々頻驚。一欄樹影半簾月。付與新鵑自在鳴。

一雨俄涼

輕雷聲軋軋。快雨濺茅檐。荷葉珠千顆。竹風青一簾。新涼

詩未就。晚酌酒頻添。忽地雲烟散。林梢掛素蟾。

菊池三溪云。荷葉竹風一聯。一字千鍊。

井上巽軒云。前聯巧妙。畫亦不能到。

贈 某

淡々襟懷絕點塵。梅妻鶴子證前因。恨紅依翠歸空夢。移竹煎茶養性真。妙素曾傳新樂譜。清癯自稱古詩人。夜深高閣吹簫坐。月冷三叉江上春。

井上巽軒云。寫情清婉。非才思流溢。安能及此。

寄書

小山五書ハ美術ナラスノ論ヲ讀ム。文學士岡倉覺三我東洋學藝雜誌ヲ閱スルニ小山正太郎氏ハ書ハ美術ナラスノ論ヲ載ス抑モ美術ノ眞理ヲ考究スル者古來歐洲ニ於

テモ甚タ稀ナリトス殊ニ東洋ニ在テハ古詩人モ「想到空
靈筆有神。每從遊戲得天真。笑他正色談風雅。戎服朝冠對
美人。」ト謂ヘル如ク美術ハ理ヲ以テ推ス可カラスト想像
シ唯慣習又ハ憶測ヲ以テ之ヲ是非スルノ弊ナキニ非ス今
小山氏獨リ慣習ヲ破リ臆測ヲ離レ書ハ美術ナラスト斷言
シ大ニ世上ノ妄想ヲ打破セリト雖モ惜ヒ夫其論據トスル
所鞏固ナラス此ヲ以テ書ノ美術ニ非サル所以ヲ證明スル
能ハサルナリ是余ノ最モ慨歎ニ堪ヘズシテ聊茲ニ論辨ス
ルコアル所以ナリ

小山氏ノ論第八第九第十ノ三號ニ跨ルト雖モ今其論旨ヲ

約言セハ左ノ四點ニ歸セン

- (一) 世上書ヲ美術トスルノ諸說ハ信スヘカラス
 - (二) 書ハ美術トナスヘキ部分ヲ有セス
 - (三) 書ハ美術ノ作用ヲナサス
 - (四) 書ハ美術トシテ勸獎スヘカラス
- 請フ逐次其論點ノ當否ヲ論セン小山氏カ先ツ駁撃ノ勇ヲ
試ミタルハ即チ世上一般ニ書ヲ美術トスルノ諸說ナリ余
ハ勿論世上ノ妄說ノ爲メニ答辨スルノ責ニ任セスト雖モ

駁議中往々當チ得サル所アルニ似タリ請フニ二ノ例ヲ舉
ケン
小山氏本邦ノ書ハ歐州蟹行文ト異ナリ美術ト云フハシノ
說ヲ駁シテ曰ク「書ハ固ト言語ノ符號ニシテ他ニ作用ア
ルニ非ス(略)其主旨タル唯タ意ヲ通スルニ在ルノミ書ニ
シテ誤リ無ク意ヲ通スルヲ得ハ則チ書ノ職分畢レリ又他
チ問フチ要セサルナリ然ハ則チ蟹行ト云ヒ鳥跡ト云フモ
其主旨職分ニ至テハ毫末モ異ナルコトナキ也」ト其論ノ歸
着スル所ハ西洋ニ於テ書ヲ美術トセサルニ我書西洋ノ書
ニ異ル性質ナクシテ特別ニ美術トスルノ理理ナシト云フ
ニ過キス然レハ我書西洋ノ書ニ異ナル性質アル所以ヲ論
定セハ他ノ論點隨テ明白ナラン夫レ美術ノ名ハ實用技術
(useful arts)ニ對シテ下シタルモノナレハ其主旨トスル所
大ニ異ルト雖モ實用技術ノ中ニテ美術ノ域ニ入ルモノア
リ例ヘハ彼ノ建築術(architecture)ノ如キ始メヨリシテ美
術トスヘキニ非ス彼ノ野蠻人ノ建ツル小屋ト雖モ風雨寒
暑ヲ防クニ足ラハ素ヨリ其職分ヲ盡セリト雖モ未ダ美術
ノ區域ニ入ルヘカラス世人ノ美術ヲ以テ許セル建築術ハ

内質ノ堅固ト共ニ外貌ノ美麗ヲ索ムル術ナリ風雨寒暑ヲ防クノ外更ニ他ニ索ムル所アルナリ若シ家ヲ建ツルノ術ヲ以テ悉皆美術ナリトセハ誰カ之ヲ正論ナリト謂ハソ書ハ固ト言語ノ符號ナリ書ヲ作ルハ實用技術ナリ苟モ字体ヲ成セハ其職分畢レリ猶小屋ニシテ風雨寒暑ヲ防クカ如シ然レモ我書ニ索ムル所ハ啻ニ字体ヲ成スニ止マラサルナリ我書ハ勉メテ前後ノ體勢ヲ考ヘ各自ノ結構ヲ鑑ミ練磨考究シテ美術ノ域ニ達スルモノコシテ歐洲人ノ唯ダ意ヲ通スルヲ以テ足レリトスルニ比スレハ大ニ異ナル所アリ按スルニ中古歐洲ニ於テ學事專ラ僧侶ニ歸シ平人ニシテ書ヲ讀ミ字ヲ作ルコトハ却テ耻トセリ故ニ英國ノ貴族中自カラマダナカルタニ記名シ得ル者甚ダ稀ナリシト云フ爾來文運ハ日チ進ムト雖モ能書ヲ貴フノ風ナク隨テ書法ヲ考究スル者斷テアラサルナリ支那ハ之ニ反シ書ヲ六藝ノ上ニ置キ盛ニ之ヲ勸奨ス朱新仲カ狩覺寮雜記ニモ「唐百官志。有書學一途。其餘人亦以身言書判。故唐人無不善書者トアリ當時人々競フテ書法ヲ考究セシヲ知ルヘシ世傳フ鐘繇ノ蔡邕ノ書法ヲ韋誕ニ求メ誕ノ傳ヘサルヲ

憤リ胸ヲ槌テ血ヲ嘔キ殆ント死ス後誕ノ塚ヲ發キ蔡邕ノ法ヲ得テ日夜攻學シ臥スレハ則チ手ヲ以テ被ニ畫キ被之カ爲メニ穿ツト山陰父子以下歐褚虞師ノ徒ニ至ルマテ名々工夫ヲ費シ機軸ヲ出ス其辛苦末々鐘繇ニ讓ラス彼皆小山氏ノ說ノ如ク書ハ唯意ヲ通スルヲ以テ足レリトセスモテ字体ヲナスノ外別ニ索ムル所アルナリ故ニ曰ク我書ハ西洋ノ書ニ異ナル性質アリト抑モ東洋開化ハ西洋開化ト全ク異ナレハ則チ美術ノ如キ人民ノ嗜好ニ因テ支配サルモノニシテ此ノ如キ差異アルハ恠ムニ足ラサルナリ小山氏又本邦ノ書ハ人々之ヲ愛翫スルニ因テ美術ナリト云フ說ヲ駁シテ曰ク「本邦人ノ書ヲ愛翫スルヤ眞ニ書ヲ愛翫スル如クナレモ詳ニ之ヲ窮ムレハ實ハ書ノミチ愛翫スルニ非ルナリ故ニ其愛翫スル所以ヲ分解スレハ則チ人々同シカラス或ハ語句ノ已ノ意ニ適スルヨリシテ之ヲ愛シ或ハ其人ヲ慕フノ餘リ手蹟ノ存スル所トシテ之ヲ愛シ或ハ古物トシテ之ヲ愛シ或ハ奇品トシテ之ヲ愛シ或ハ慣習ニ由テ之ヲ愛シ或ハ雷同シテ之ヲ愛シ或ハ就テ學ハン爲メ模範トシテ之ヲ愛ス云云然モ繪畫音樂其他ノ美術ニ

於テモ一般ニ此弊ナキニ非ス例ヘハ僧侶ニシテ佛畫ヲ愛シ舊弊家ニシテ七福人ノ畫ヲ愛シ官軍ニシテ朝敵征伐ノ歌ヲ愛シ(以上三者ノ愛ハ自身ノ意ニ適スルヲ以テナリ) 某天子ノ御製ヲ愛シ何大師自作ノ肖像ヲ愛シ(以上ハ其人ヲ慕フノ餘リ其遺蹟ヲ愛スルナリ)古物家ニシテ天竺佛ヲ愛シ(古物トシテ愛スルナリ)古法眼ノ脱ケ雀ヲ愛シ都良香カ羅城門ノ聯ヲ愛シ(奇品トシテ愛スルナリ)趣味ヲ解セサル人ニシテ畫ヲ坐間ニ掛ケ意義ヲ知ラサル者ニシテ唐詩選ヲ暗誦シ(慣習ニ由テ愛スルナリ)畫ハ必ス文人畫ヲ貴ヒ疎惡ナレモ風韻アリトシ詩ハ多ク綺語ヲ交ヘ骨カナキト雖モ風雅ニ近シトス(雷同ニシテ愛スルナリ)由此觀之ハ小山氏ノ所謂書ヲ愛セスノ他ヲ愛スルノ弊ハ獨リ書ニ限ラス他ノ美術モ皆此弊アリ是識者ノ許セル所ナリ獨リ書ノミヲ責メハ到底不公平タルヲ免ガレサルナリ小山氏又本邦ノ書ハ人心ヲ感動スルニヨリテ美術ナリト云フ説ヲ駁シテ曰ク如何ニ巧ナル書ナリモ不通ノ誤リヲ記セハ人心ヲ感スル無ク拙キ書ナリモ名文名句ヲ記セハ人心ヲ感スルヤ必セリト嗚呼是何ノ言ソヤ抑モ詩文ニ感

スルノ情ハ大ニ書ニ感スルノ情ニ異レリ之ヲ混同スヘカラス例ヘハ李大白ノ詩ヲ張旭ニ寫サシメハ人之ニ對シテ二様ノ感覺ヲ起スヘシ一ニハ詩仙ノ詩豪邁快活ナルヲ愛シ(此時詩ヲ見テ書ヲ見スト云フモ可ナリ)二ニハ草聖ノ書奔放駭逸ナルヲ愛サン(此時書ヲ見テ詩ヲ見スト云フモ可ナリ)若シ小山氏ノ謂フ如クナレハ世ハ唯々李杜韓柳アルニ龍ノ天門ニ跳リ虎ノ鳳閣ニ臥スル如キ妙書アリト雖モ人之ニ感スルコ決シテ非ルヘシ 以下次號

雜 報

○醫學部教授櫻村清德氏ハ頃日虎列刺病新治療法ヲ發明セラレ已ニ患者二三名ニ實施セラレシニ其功驗アリシト
○農商務省ニ於テ施行セラル、地質調査ハ全國ヲ數拾區ニ分別シ漸々一區ツ、ヲ檢査シ終ラル、目的ナルカ已ニ第一區即チ利根川及富士川間ノ調査ハ凡ソト落成スルヲ以テ本月中旬第二區即チ利根川及那珂川間(西北界ハ越後)ニ着手セント調査長ドクトル、ナウマン氏ハ調査員理學士山田皓氏ヲ同伴シ試査ノタメ出張セラレ而シテ他ノ

調査員理學士巨知部忠承氏ハ越前加賀、理學士山下傳吉

氏ハ甲斐、駿河、伊豆、理學士中島謙三及理學士横山又二郎

ノ兩氏ハ天龍川及富士川間ノ諸國(北界諏訪湖)西山正吾

氏ハ陸前以北ノ諸國、伴市太郎氏ハ美濃、飛驒、信濃等ニ派

出セラレ又理學士堀田連太郎氏ハ岩城岩代加賀美濃飛驒

等ニ存在セル諸鑛山ヲ巡視セラル、由

○豫備門長正七位杉浦重剛氏ハ豫備門教諭ヲ兼任セラル

○日本地震學會雜誌(洋文)ノ第四號ヲ發刊シ頃日社員其

他ニ配布セラレタリ

○獨國ニ留學セラル、理學士小藤文二郎氏ヨリノ報道ニ

一昨年來岩石顯微鏡上ノ試験ニツキ新奇ノ方法發明少ナ

カラス近頃三斜長石ヲ光線上ノ驗法ヲ以テ區別スルコトヲ

得ルニ至レリ又岩石成分ヲ比重ニ依リテ器械的ニ區分シ

各一ニ分析スル新法アリ其他越歴的磁石力ヲ以テ區別ス

ル法モ發明アリシ云々

○函館港在留ノ人ヨリ社員ノ元ニ達シタル書翰中ニ小生

本港各所散歩中岸地ニ於テ矢根石、石筍、等ヲ撫取シニ其

出所ハ曾テ西人某既ニ發見シ今現ニ當地博物館ニモ列品

セラル、由然ルニ土瓶等ノ遺物尙諸所ニ散在シ多クハ破

碎シテ其全体ヲ存スルモノ稀ナリ而シテ其出場ハ港内二三

ヶ所アリト記セリ

○東京大學助教授理學士富士谷孝雄氏ハ加賀手取川近傍

ノ「ジュラ」期ノ化石ヲ採集ノタメ出張セラレタリ

○肥前高島ノ炭坑ハ炭層採掘ニ當リ斷層、上下ノ岩層柔

軟等ノ如キ各種ノ防碍アリ所謂炭脈ノ總病ヲ備フレハ採

炭ヲ研窮スルニハ屈竟ノ地ナリト或鑛山學士ノ語ヲレキ

○仙臺ヨリ歸京ノ人ニ聞クニ彼ノ常盤町ノ毒蝶(一二ノ

記載)ハ淡黃金色ニシテ大サハ通常ノ蛾ノ如ク之ニ觸ル

、キハ同色ノ粉ヲ落シ始メ痒ヲ覺ヘ漸々腫レ二三日ヲ經

テ癒ユルト雖モ永ク瘡痕ヲ滅セスト云フ因テ近々當地ニ

標本ヲ送致ノ約アレハ着次第詳細ノ實驗ヲナシ諸彥ニ報

道セン

○東京大學文學部外山正一全矢田部長吉並ニ文學士井上

哲次郎三君全撰の新體詩抄初篇ハ既ニ丸善にて發兌セリ

蓋シ三君ハ嘗テ古歌や漢詩の解し難きと憂ヒ泰西の詩風

に倣ヒ日本通常の語を用ひて一種新體の詩を作り或ハ泰

西の詩を譯し或の自ら情思を發舒せられしが日を逐ひ月を経て金篇玉章輿然として冊を成せしに至る是に於て其佳ある者を撰び此書と作爲せられしと云ふ苟も文學に志ある人の必き一讀するべき書あり

○外山正一君の頃る復と新体破邪教詩と云ふ一篇の詩を著しされし此詩の主意の専ら邪蘇教を排斥するにありて凡そ五十葉ばかりの長さあり其文極めて周到にして其論最も精核あり恐くの和漢の詩歌に其比類あらざるべしと云ふ

○東京大學總理加藤弘之君も亦近々一篇の政体書と著し新奇の説と述べ且つ往日の説の非ある所を示し以て世人の惑を解かるゝ由

○東京數學會社の本年六月第三期の終に於て大に改革を爲し従前の如く社長を置く事を廢し凡て同會の事務の二名の事務委員と十二名の學務委員にて擔當する事に決り前社長柳猶悅氏の此決議の翌日退社し七月の會に於て委員の設票を開き川北朝隣長澤龜之助の二名を事務委員に荒川、中川、岡本、村岡、菊地等の十二名を學務委員に選定し

會社雜誌の毎月學務委員一名宛輪番と以て其編輯を負擔する事に決し八月の雜誌を菊地大麓氏に委任し社則改正の爲に岡本川北の二氏を起草委員と爲し八月の例年の如く休會あるを以て九月の會に於て之を議する事に決し又内田吾觀君石碑の爲に贖金とる事を決し又同會々員の毎月第一の土曜日に東京大學に會し數學上の譯語を一定するゝ由同會の會員凡そ六十名にして創立以來數度の盛衰を経られども今日に至りて頗る隆盛の景況あり

○法學士元田肇氏辨護人と知られざる細野市太郎放火被告の件に此程東京重罪裁判所は於て吟味されざるが七月四日無罪の言渡ありたり右の新律施行以來事實にて無罪の言渡ありたる始ありと云ふ

○本誌第十號中殊々雜錄中誤字多クレハ左ニ正ス
十七頁上段五行ニ崔巍トアルハ崔嵬ノ誤
全六下段三行ニ饑饉トアルハ譏讒ノ誤
全一頁上段三行ニ藤原道憲トアルハ通憲ノ誤

○二十三頁下段六行遣賞トアルハ遺賞ノ誤
○十八頁上段三行凶陷トアルハ凶焰ノ誤